

英米古典簿記書研究拾遺

久野秀男

目次

- I 序論
- II 商品勘定の変遷と課題
- III 『帳合之法』・『馬耳蘇氏複式記簿法』
・『商家必用』の帳簿組織
——比較英米古典簿記書論および現代
簿記教育論——
- IV 元帳の総括および次期開始記帳につ
いて
——「英米式決算法」への道——
- V 著者名等の呼称(カナ文字表記)およ
びタイトル・本文のスベリング等につ
いて
- VI Bookkeeper か Accountant か
- VII 押韻の仕訳ルール
- VIII 仕訳帳金額欄の変遷と問題点
- IX ジョーンズ簿記の原理とその批判者
達
- X 幻の書・『オールドカッスル簿記書』
とその周辺
- XI 英米古典簿記書解題(追加)
ブラウン(John Brown)の小冊子
(1616)
ダフォーン(Richard Dofforne)の
第2の簿記書(1670, 第3版)
ディルワース(Thomas Dilworth)
の簿記書(1777 in London, 1803
in New York)
マルシュ(C. C. Marsh)の初期
の簿記書(1832)
メサーベイ(A. B. Meservey)の

簿記書(1875)

XII 補項

I 序論

筆者は、この論集・第13巻の第3号(1977年3月)および第14巻の第1号(1977年9月)に発表した《英国古典簿記書(1543年～1887年)の発展史的研究(1)・(2)》を大幅に補筆・改訂して、『学習院学術研究叢書・英米(加)古典簿記書の発展史的研究』(1979年5月, 第一法規出版株式会社刊)を刊行する機会をえた。

この『拾遺』は、これらの一連の調査研究を通じて、主として紙幅の関係で十分に意をつくさなかった事項、あるいは、確定稿として発表するのに多少とも(あるいは大いに)躊躇された事項等をあえて収録したものである。

以下に、前掲の『拙著』の目次を参考のために掲示しておく。

第1部 論説

序章 この調査研究の対象と目的

第1章 総論；近代簿記への道

第1節 イタリア簿記の伝統の継承者達

補節(1) Ledger(元帳)の語源に関する諸説および貸借簿記語法的一般化

補節(2) account, accountable, accountant, & accountability

第2節 伝統の完成者と改革者達

(1) 単一仕訳帳制から複合仕訳帳制へ

(2) 伝統の完成者 J. メヤー

(3) 伝統の改革者 B. ブースとその継承者達；複合仕訳帳制の系譜

第3節 近代簿記の系譜；その直系と傍系

(1) 直系の人々；弁証法的展開

(2) 傍系の人々；現金式仕訳帳制の登場，異端の改革者ジョーンズ等

(i) ハミルトンの「現金式」とその継承者達

(ii) ジョーンズの「英国式」

(iii) ディーガンの「ダブリン式」

(iv) ランバートの「恒久バランス」

第4節 「資本等式」の完成者達(F.W. クロンヘルムとB.F. フォスター)と現代簿記への先駆者達(J. ソーヤーとT. バタースビー)

第2章 各論Ⅰ；勘定学説の展開

第1節 擬人的受渡説の伝統

第2節 擬人的受渡説からの離脱

(1) ステフェンスの「財産等式」

(2) メヤーとクロンヘルムの「資本等式」

(3) 「資本等式」の継承者達

第3節 人的学説・物的学説の功罪

第3章 各論Ⅱ；「英米式決算法」の文献史的考察

第1節 設題

第2節 英国古典簿記書における残高勘定の伝統

第3節 「英米式決算法」への展開

第4章 各論Ⅲ；英国式貸借対照表の文献史的考察

第1節 諸学説の検討

第2節 英国古典簿記書の調査とその結論

(1) 問題の所在

(2) Balance Sheet の機能の転換および「英国式」の起源に関する一省察

第5章 各論Ⅳ；Balance Sheet(s)の源流と展開

第1節 balance；平均概念と残高概念

第2節 平均表（諸表）としてのBalance Sheet(s)

第3節 残高表（残高検証表）としてのBalance (Proof) Sheet

第4節 残高検証表から財務表へ

第6章 各論Ⅴ；産業革命期の簿記改革

第1節 設題

第2節 要旨

第7章 各論Ⅵ；混合商品勘定の重要性

第1節 シェヤーの謬見

第2節 商品勘定の伝統

第3節 混合勘定は簿記の欠陥ではない

第2部 英国古典簿記書解題

オールドカッスル (Hugh Oldcastle) = メリス (John Mellis) の簿記書 (1543=1588)

(補論Ⅰ)：オールドカッスル簿記書異聞
イムピン (Jan Ympyn Christoffels) の簿記書 (英訳版, the English version, 1547)

ピール (James Peele) の2種の簿記書 (1553と1569)

(補論Ⅱ)：初期の簿記書の命運

ヴェディントン (Johan Weddington) の簿記書 (1567)

ニコラウス・ペトリ (Nicolaus Petri) の簿記書 (英訳版, the English version,

by W. P., 1596)
 J. C. (Carpenter) *Gent.* の簿記書(1632)
 ダフォーン (Richard Dafforne) の簿記書 (1635)
 コリンズ(John Collins)の簿記書(1653)
 リセット (Abraham Liset) の簿記書 (1660)
 モンティージ (Stephen Montage) の簿記書 (1682 第2版, 初版は1675)
 コリンソン(Robert Colinson) の簿記書 (スコットランドで最初の簿記書, 1683)
 ノース (Roger North, *a Person of HONOUR. anonymous*) の簿記書 (1714)
 マギー (Alexander Macghie) の簿記書 (1718)
 マルコーム (Alexander Malcolm) の簿記書 (1731)
 ステフェンス(Hustcraft Stephens)の簿記書 (アイルランドで最初の簿記書, 1735 in London, 1737 in Dublin)
 メヤー (John Mair) の簿記書 (1736 in Edinburgh, 1737 in Dublin)
 ゴードン (William Gordon) の簿記書 (1765第2版, 初版は1764?)
 ドウリング (Daniel Dowling) の簿記書 (1765)
 ドン(Benjamin Donn)の簿記書(1778 第2版, 初版は 1758 or 1759)
 ジャクソン(William Jackson)の簿記書 (1785)
 ハットン (Charles Hutton) の簿記書 (1785第7版, 初版は不明)
 ハミルトン(Robert Hamilton)の簿記書 (1788第2版, 初版は1777)
 ブース (Benjamin Booth) の簿記書 (1789)
 ジョーンズ (Edward T. Jones) の簿記書

(1796)
 フルトン (John Williamson Fulton) の簿記書 (1799 in Bengal, 1800 in London)
 ケリー (Patrick Kelly) の簿記書(1801)
 ディーガン (P. Deighan) の簿記書 (1807)
 セジャー(John Sedger)の簿記書(1807)
 モリソン (James Morrison) の簿記書 (1808)
 ランバート (John Lambert) の簿記書 (1812)
 パワー(Michael Power)の簿記書(1813)
 クロンヘルム (F.W. Cronhelm) の簿記書 (1818)
 ラングフォード (R. Langford) の簿記書 (1822)
 コリー (Isac Preston Cory) の簿記書 (1839)
 フォスター(Benjamin Franklin Foster) の簿記書 (1843)
 フォスターの『簿記史』(The Origin and Progress of Book-Keeping, 1852)
 プリング (Alexander Pulling) の簿記書 (1850)
 シェリフ (Daniel Sheriff) の簿記書 (1853第2版, 初版は 1850)
 イングリス(W. Inglis) の簿記書 (1849, 1861, 1872)
 クレップ (F.C.Krepp) の簿記書(1858)
 ソーヤー (Joseph Sawyer) の簿記書 (1862第2版, 初版は 1852?)
 バタースビー (Thomas Battersby) の簿記書 (1878)
 ガルク・フェルス の『工場会計』(Emile Garcke and J.M. Fells, *Factory Accounts, etc.*, 1887)

第3部 米(加)古典簿記書解題

序論 この調査研究の対象と目的

本論 米(加)古典簿記書解題

ミッチェル(William Mitchell)の簿記書
(1796)

ジャクソン(William Jackson)の簿記書
(1785 in Dublin, 1811 in New York)

ベネット (James Bennett) の簿記書
(1820)

コルト (J. C. Colt) の簿記書 (1837)

フォスター (B. F. Foster) の簿記書
(1839第3版, 初版は1836)

リッチモンド (Wellington Harrison
Richmond) の簿記書 (1846)

クリテンデン (S.W. Crittenden) の2種
の簿記書 (1850と1853)

メイヒュー (Ira Mayhew) の2種の簿記
書 (1860第60版と1852)

プレストン (Lyman Preston) の2種の
簿記書 (1829と1851)

ブライヤント・ストラットン・バック
ード(Henry Beadman Bryant, Henry
Dwight Stratton, Silas Sadler
Packard) の簿記書の3部作 (1860, 18
61, 1863)とその新訂版 (1878, 1881)

オル (William Orr) の簿記書 (1872)

フォルソム (Ezekiel Gilman Folsom)
の簿記書 (1873)

マルシュ (Christopher Columbus
Marsh) の簿記書 (1877増補版)

グッドウィン (Joseph Henry Goodwin)
の簿記書 (1895第17版, 初版は 1881)

スプラッグ (Charles Ezra Sprague) の
簿記書 (1907)

Ⅱ 商品勘定の変遷と課題

(1) 商品勘定の変遷

筆者は、甚だ迂闊なことであるが、この一連の調査研究に着手する前までは、商品勘定の変遷について、ある種の先入感ないし類型化した定見(むしろ速断といった方があっている)にとらわれていたように思われる。すなわち、生糸勘定とか胡椒勘定(第1胡椒勘定、第2胡椒勘定等)といったいわゆる実名商品勘定、つまり中世商業(交易)の代表的商品名を付した勘定群が、個別に勘定口座として元帳(*quaderno, libro grande*)に開設された時期は、そう永くは続く筈がない。補助簿に関しては、とくに、現金出納、商品管理等について当初から重視され採用されていたのであるから、この種の補助簿の充実・拡大とともに、実名商品諸勘定は、ほどなく廃止されて、元帳面では、1個の機能的な混合商品勘定が登場したに違いないと。

勿論、この場合でも、今日のわが国の『簿記テキスト』に必ずといってよいほど型にはまったように出てくる例の「分記法」と「総記法」の解説に関連してあえていうと、とくに「分記法」なるものが、実用に供されていたとは考えてはいなかった。事実、商人の簿記で、いわゆる分記法(売上に付き、原価による商品・資産の減少と、売価と原価の差額による販売益・収益の発生とを、分記して貸方に仕訳する方式)が実用されたことは、原則として、まずない。英国古典簿記書群の上で、分記法にお目にかかったこともない。「分記法」・「総記法」という名称これに当る英語もみたことはない。従って、この点に関する限りでは、今般の調査研究は、筆者の考え方について裏付けを与えてくれたように思う。商人の伝統的な商品売買の記帳方式については、次

英米古典簿記書研究拾遺 (久野)

LEDGER A.

(R. Hamilton, An Introduction to Merchandise, pp. 310~311)

Dr.				Contra,			
Calicoes.				Cr.			
1774				1774			
Jan.	3	To Cash, at 3s. 2d.	105	Feb.	10	By Sundries, per J. at 3s. 6d.	100
Apr.	30	To Profit and Loss, for gain	—	Apr.	18	By Proper Expenses taken at 3s. 2d.	5
			105				105
Ja. Cuthbert, merchant Leith,				Contra,			
1774				1774			
Jan.	3	To Meal, for 50 bolls, at 13s. 3d.	2	Feb.	3	By Cash, in part	1
Mar.	21	To Clover-seed, for 70 lb. at 7½ d.	6	Apr.	30	By Balance-accompt	7
			35				35
Diaper,				Contra,			
1774				1774			
Jan.	5	To Yarn in barter, at 1s. 9d.	2	Apr.	2	By Cash, at 1s. 11d.	50
Apr.	30	To Profit and Loss, for gain	—		5	By William Ainslie, at 2s.	30
			80				80
Salt,				Contra			
1774				1774			
Jan.	13	To William Bruce, at 1s. 8d.	5	Jan.	18	By Sundries, per J. at 1s. 9d.	150
Mar.	1	To Cash, paid charges and cellar-rent	—	Feb.	1	By Ja. Boswell, for the rem. at 1s. 8½ d.	48
			200	Apr.	30	By Profit and Loss, Deficiency	2
			200				200

LEDGER D.

(P. Deighan, A Complete Treatise on Book-Keeping, pp. 54~57)

Dr.				Contra,			
Hardware,				Cr.			
1806				1806			
April.	1	To Stock, as per Journal	1	April.	8	By Cash in Co. sold Messrs. T. and F. Coleman, per Account	1
May.	27	To Sundries, as per Journal	1000		10	By Silvester Costigan ditto	536
		To Profit and Loss in Co. gained by this Account	0		5	By My Account Proper, per Account	200
			1061		13	By William Abern, as per Account, at 12 months	550
			9		10	By Balance in Co. remaining in General Store-house	8
			2166				240
Dr. Calicoes,				Contra,			
1806				1806			
April.	1	To Stock, as per Journal, for	200	April		By Blance in Co. remaining unsold	200
			2000				2000
Dr. Coarse Cloths,				Contra,			
1806				1806			
April.	1	To Stock in Co. for	No.1 Yds. 269	April.	10	By Silvester Costigan, per Account, for	No.1 Yds. 60
	21	To Sundries for	No.2 Yds. 800		12	By Sundries, for	No.2 Yds. 80
		To Profit and Loss in Co. gained hereby	No.3 Yds. 1000		27	By John Foulter, for	No.3 Yds. 900
			No.4 Yds. 900		20	By Thomas Fulham, for	No.4 Yds. 800
			No.5 Yds. 800				No.5 Yds. 900
			800				800
			960				900
			1060				1000
			1000				920
			2032				2032
Dr. Cottons,				Contra,			
1806				1806			
April.	1	To Stock in Co. as per Journal, for	No.1 Yds. 1000	April.	12	By Sundries, for	No.1 Yds. 800
		To Profit and Loss in Co. gained hereby	No.2 Yds. 800		7	By John Shea, Our Account of Goods.	No.2 Yds. 500
			No.3 Yds. 500				1000
			1				800
			228				500
			9				1000
			238				800
Dr. Stuffs,				Contra,			
1806				1806			
April.	1	To Stock in Co. as per Journal, for	No.1 P's. 6	April.	10	By Silvester Costigan, for	No.1 P's. 10
		To Wm. Knox, for	No.2 P's. 100		12	By Sundries, for	No.2 P's. 6
	25	To Profit and Loss in Co. gained by this Account	No.3 P's. 100		27	By John Foulter, for	No.3 P's. 100
			1		20	By Thomas Fulham, for	No.4 P's. 100
			43				100
			5				110
			375				10
			9				492
			73				10
			192				492

項の《混合商品勘定の重要性》でのべる。
ところで、実名商品勘定群の登場は、ごく

初期のことで、ほどなく機能的な混合商品勘
定に移行する。さらに、このいわゆる混合商

Dr.

MERCHANDISE

Cr.

Dr.				Cr.			
			Page of Journal			Page of Journal	
1852.				1852.			
March	5	To Sundries,.....	1 £ 703 2 6	March	8	By George Lodlie,	1 £ 73 2 6
"	14	" Robert Henderson,	1 337 10 0	"	10	" Bills Receivable,	1 112 10 0
"	15	" Cash,.....	1 180 0 0	"	12	" Cash,.....	1 28 2 6
"	16	" Bills Payable,.....	1 472 10 0	"	13	" Thomas Jackson & Co,	1 450 0 0
"	"	" Cash,.....	1 450 0 0	"	19	" Cash,.....	2 56 5 0
April	11	" Sundries,.....	3 279 0 0	"	24	" Sundries,.....	2 92 5 0
"	13	" ".....	3 1,469 19 0	"	26	" ".....	2 90 0 0
"	"	Amount,.....	3,892 1 6	April	2	" Bills Payable,.....	2 123 15 0
May	10	" De La Rue's Consignment,.....	5 450 0 0	"	4	" Shipment to Liverpool,	2 387 10 0
"	28	" Company 1 Merchandise,.....	6 280 18 3	"	6	" Bills Receivable,	2 72 0 0
June	2	" Sundries,.....	6 522 0 0	"	17	" Bills Payable,.....	3 337 10 0
"	30	" Cash,.....	8 922 14 6	"	20	" John Smiley,.....	3 330 15 0
"	"	" Sundries,.....	9 1,604 11 9	"	23	" Sundries,.....	3 364 10 0
"	"	" Profit & Loss,.....	10 506 1 3	"	"	" ".....	3 450 0 0
				"	27	" Shipment to Demerara,	4 270 0 0
				"	"	Amount,.....	4,238 5 0
				May	2	" Sundries,.....	4 177 6 0
				"	9	" ".....	5 55 2 6
				"	11	" Cash,.....	5 118 2 6
				June	10	" John De La Rue,.....	7 9 0 0
				"	13	" Shipment to Glasgow,	7 598 10 0
				"	18	" Sundries,.....	8 413 8 9
				"	30	" Cash,.....	8 1,764 0 6
				"	"	" Sundries,.....	9 804 12 0
				"	30	" Balance,.....	9 1,000 0 0
			8,178 7 3				8,178 7 3

品勘定から仕入勘定, 売上勘定, 繰越商品勘定等への「商品勘定の分割」も, 補助簿の充実と相俟って比較的早い時期に始まっているであろう。ところが, 以上の推論 (拙見) は, もののみごとに外れた。商人の実務面で実証されてはいないが, すくなくとも古典簿記書の調査を通じて知る限り, 実名商品勘定群の採用の時期は, 案外永くつづいている。

ここでは, すでに前稿で解題してある簿記書から, ハミルトン (1788) の元帳, ディーガン (1807) の元帳およびシェリフ (1850) の元帳の状況を再録しておこう。このうち, 前世紀の後半のシェリフの場合に至って, ようやく機能的な混合商品勘定が登場していることに注目されたい。ちなみに, 人名勘定の時代は, まだまだつづく。売掛金・買掛金の両統制勘定の登場は, 大分後のことである。

かかる商品勘定の状況に関し, 次のように推論する余地があるかも知れない。すなわち, なるほど簿記書での実名商品勘定と人名勘定の時代は, たしかに永い。しかし, これは, 簿記の学習の便からきているいわば一個の伝習ともいふべきもののなのであって, 実務面で

の実況は必ずしもそうではないのだと。

商品 (混合) 勘定つまりわが国の『簿記テキスト』の常用語でいういわゆる商品 1 勘定制から, 商品勘定の分割, その典型でいえば繰越商品勘定, 仕入勘定, 売上勘定の商品 3 勘定制への移行は, どうか。この点に関していえば, むしろ, 米書のスプラッグ (Charles Ezra Sprague, 1842~1912), The Philosophy of Accounts (1907, 5th. ed., 1922~23) などがその典型であろう。時期としてはすでに今世紀に入っている。なお, この有名な (勿論, 内容も優れている) 簿記書では, 巻末の Monograph B 「商品勘定」で混合商品勘定を解説するとともに, 第 421 項 (Monograph B, 421, P. 159) で, 次のようにいう。

421. The modern practice is to separate the merchandise Account into three : Merchandise, Sales, and Purchases ; or at least the former two.

以下, 第 423 項までで (pp. 159~161) 簿記手続 (仕訳と勘定口座記帳の実況) を解説している。

（2）混合商品勘定の重要性

一時代前まで（あるいは、現在でも、といってもよいかも知れない）、わが国の会計界（正確には会計学ないし会計教育の領域といった方がよい）に強い影響力をもった書物にシェヤー（Johann Friedrich. Schär, 1846～1924）の *Buchhaltung und Bilanz*（1 Aufl. 1914. 1922 6 erw. Aufl. von Prion 1932）がある。その緒論、第1編「会計学……会計学の数学的基礎」、第3編「応用会計……会計学の経済的基礎」および附録第2「物価騰貴……貨幣価値減少と貸借対照表」の訳書が、林良吉訳『会計及び貸借対照表』（大正14年4月、同文館刊、大正15年2月再版）として刊行されている。

このシェヤーによると、「混合勘定なる觀念は吾人が始めて著書並びに教材に加えたものである」（p. 177）とあり、第1編の第3章・第2款《混合勘定》の解説では、混合勘定とはその残高が2個の未知数の和または差をあらわすものと定義し、混合商品勘定の例をあげている。いうまでもなくこの場合、2個の未知数とは、手許在高と損益のことである。また、あえて「混合」（mixed）した「勘定」というのは、資産たる実体（在）勘定の要素と損益たる名目勘定の要素との混合を指すことはいうまでもない。さらにシェヤーは、このような混合勘定の使用は、手許在高の決定つまり「棚卸」を必要とするので、「棚卸より棚卸までの間は、簿記は不完全な状態にある」（p. 121）とし、これをもって、「簿記におけるやむをえざる弊害（*ein notwendiges Übel*）」であり、「簿記の欠陥」であるとまでいう。

シェヤーの前掲書がとくにわが国の簿記・会計（教育）界に与えた影響には、誠に大なるものがある。そこで、あえていうが、このシェヤーの考えは、根本的に誤っている。そのよってきたる原因には、2つの事柄が考え

られる。第1は、彼の所見は、商人簿記の伝統ともみるべき成果計算指向・フローに関する認識が薄弱であること、第2は、当然の事ながら、彼は簿記実務の伝習に対して驚くべきほど無知であること、による。

イタリア式（ベニス式）簿記と称された複式簿記の知識があるとうとあるまいと、また、洋の東西を不問、商人が商品の仕入・売上を記帳する伝統的な方法は、例外なく、資本循環のフローにそくした次のようなものであった。説明の便宜上、ここでは、左横書きの洋式装釘帳簿を用いるものとして話をすすめる（右開き縦書きの場合は、以下の説明で左右とあるところを上下と考えればよい）。

商人達は、この場合、帳簿を見開いて左（頁）に仕入の実況（数量、単価、金額、この場合いうまでもなく仕入原価額）、右（頁）に売上の実況（数量、単価、金額、この場合いうまでもなく売価額）を記帳した。

（左頁）	中央	（右頁）
生 糸		生 糸
仕入の実況 （原 価）		売上の実況 （売 価）

これを、簿記のいわゆる勘定口座の形式になおせば、こうなる。

（借方）	生 糸	（貸方）
仕 入 （原 価）		売 上 （売 価）

この場合、実名商品勘定たる生糸勘定の帳尻（残高）は、2個の未知数の混合物であり、生糸の在庫もその販売損益も、このままでは不明である。

商人達は、この場合、次のように考えたのである。

「当該商品の実在高（つまり棚卸高）と帳簿在高（つまり帳尻）の差額が販売損益、前者が大きければ利益、後者が大きければ損失」と。

この考え方は、これを一般化していうと、「資本の実在高と帳簿在高との差額が損益」となる。これが財産法の基本的な利潤計算の一般原理（general theory）なのである。

商人達が、殆ど本能的に心得ていたこの利潤計算の仕組みを、非商人達（私達の身近な例では教室での学生達）に解説するとなると、甚だまわりくどいことになる。つまり、こう説明する。

先掲の生糸勘定の販売益を計算するにはどうしたらよいか。その時点（つまり販売益を計算しようとする時点）で、すべて売りつくしたと考えればよい。この場合、生糸の完売まで販売損益の測定を待てばよいとも考えられるが、これは甚だ非現実的で、偶々、生糸は完売になったとしても、その時点で、他の商品、例えば胡椒が同時に完売の状態になるという保証はない。これでは、いくらまっても揃って同時に完売になることは、まずあるまいから、商品全体の損益計算は、いつまでたってもまとまらない。かくして、生糸勘定につき、完売の状態を想定するとすれば、原価（仕入原価）で売却したものとみなせばよいから、この勘定の帳尻は、次のように、間違いなく販売益を示す。

生 糸			生 糸		
(借方)			(借方)		(貸方)
仕 入 (原価)			仕 入	売 上	
				棚卸高	
				K (販売益)	

斜線の部分が帳尻であるから、先述のように、「当該商品の実在高と帳簿在高」つまり「棚卸高(a)と帳尻」の差額が損益ということになる。

かくて、販売益を計算する必要が生じたとき（必ずしも定期決算制の採用を前提とする必要はない）、在庫品を売りつくしたと仮定するためには、その時点での手許在高（実在高）の確認が必要となる。これが商品の stock-taking つまり「棚卸（在庫棚卸）」である。

「棚卸高と混合商品勘定の帳尻の差額が損益」という、商人達にとって、いとも簡単な常識を、シェヤー流に「混合勘定の数学的説明」といった甚だもってまわった解説をする方が、よほどどうかしているのである。また、シェヤーのいう「棚卸から棚卸までの間は、簿記は不完全なる状態にある」といった論法が成り立つとしたら、そもそも、「決算整理」は意味をなさなくなる。「混合勘定を、強いて単純勘定に人為的に擬制・還元する手続」が、「決算」ないし「決算整理」の本義なのであるから。いわゆる実体勘定（現金と資本金を除くほとんどの実体勘定といってもよい）は、時の流れとともに、着実かつ必然的に、いわゆる「混合勘定」化していくのであって、いわゆる「単純勘定」なるものは、しょせん観念の産物にすぎない。

蛇足ながら一言する。「往時の損益計算と今日の（近年の）損益計算との違いは、期間性の有無にある」といった議論をよく耳にする。この意味が、もし、往時はいわゆる分記法によりその都度、商品販売益の計算をしたからいわば一種の対象計算であり、とくに期間を予定する必要がなかったが、近時はいわゆる総記法によっているので、販売損益の計算は、いきおい期間計算にならざるをえない。こういった主旨のものであるとしたら、これはまったくの誤りである。実務上では、前述のように、例外なく（ほとんどなく）、いわゆる総記法である。従って、往時といえども、一種の期間計算であったわけで、今日のような、定期決算制を採用したとは限らないとい

うこと、つまり、定期決算制の普及が、比較的近時のことに属するという意味である。この事実認識について、誤解のないようにしておかねばならないと思う。速断・予見の如きは言語道断である。

Ⅲ 『帳合之法』・『馬耳蘇氏複式記簿法』・『商家必用』の帳簿組織

—— 比較英米古典簿記書論 および現代簿記教育論 ——

次掲の簿記書は、わが国への洋式簿記（舶来の複式簿記）の導入期における代表的な記述書であり、その影響力は甚だ大きかった。幸いに、オリジナル・テキストとともに筆者の手許に揃っているので、紹介しておく。

銀行簿記精法、明治六年十二月刊行、大蔵省、紙幣頭従五位 芳川顯正 謹序（明治六年八月十三日）、紙幣頭従五位 芳川顯正 督纂、紙幣頭書記官 英人 啊爾噠 遲度述、紙幣寮九等出仕 海老原 濟、紙幣寮九等出仕 梅浦 精一 訳、紙幣権助 小林 雄七郎、紙幣寮九等出仕 宇佐川 秀次郎、紙幣寮九等出仕 丹吉 人 補校正、木版の和装大型本全五巻。

帳合之法、2533, 1873, 明治六年六月、福沢諭吉 訳、慶応義塾出版局、初編二冊、2534, 1874, 明治七年六月、二編二冊、木版の和装中型本全四巻。「筆端能ク一世ヲ経緯シ努力以テ天下ヲ富実ス」

馬耳蘇氏記簿法、明治八年三月・十月、文部省、原序シー、シー、マルシュ 誌、小林儀秀 訳、木版の和装大型本全二巻。定価金三拾弍銭。

馬耳蘇氏複式記簿法、明治九年九月、文部省、原序千八百五十八年十月一日 紐育、記者 誌、小林儀秀 訳、上中下合本・洋装 小型本（但し、他に諸版が多くある）。

商家必用、明治十年一月 新民社 蔵版、加藤斌 訳、記簿教則 初編 単認之部 初篇 上下、原序ウ、イングリシ 誌、明治六年六月十日 叙春 嶽永 撰併記、商家必用 序紀元二千五百三十三年五月 小野行敏 撰 学仙 昇書 於墨江 精舍、商家必用 序紀元二五三三 小田切 威徳 撰並書、明治十年一月三十一日 版權免許、明治十年四月 新民社 蔵版、記簿教則 複認之部 二篇 上下、附録、明治十年一月三十一日 版權免許、木版の和装中型本 附録とも全五巻。

『帳合之法』ほか2書のオリジナル・テキストは、次掲の簿記書である。

Bryant and Stratton's Common School Book - Keeping ; embracing Single and Double Entry, containing Sixteen Complete Sets of Books. with ample exercises and illustrations. For primary schools and academies. By H. B. Bryant, and H. D. Stratton, Founders of the international chain of commercial colleges, located in the principal cities of the U. S. and the dominion of Canada, and S. S. Packard, resident principal of the New York city mercantile college. New York : Ivison, Blakeman, Taylor, & Co., 1871. (但し、初版には Entered, according to Act of Congress, in the year 1861 とある)

The Science of Double-Entry Book-Keeping, simplified by the application of an infallible rule for journalizing;calculated to insure a complete knowledge of the Theory and Practice of Accounts : being a series of well-selected mercantile transactions, so arranged as to form a complete course of practice and instruction ;designed for the use of schools and counting-houses in the United States ; including numerous

examples of mercantile calculations ; and an original diagram showing the relation between the account books. By C. C. Marsh, Accountant, Author of "The Theory and Practice of Bank Book - Keeping and Joint-Stock Accounts," "Single-entry Book - Keeping improved," etc. Enlarged and Improved 1858. New York : D. Appleton and Company, 1877. (筆者の手許にあるのは、この増補版である)

Chambers's Educational Course. Book-Keeping by Single and Double Entry with an appendix containing explanations of mercantile terms and transactions, questions in book-keeping, &c. By W. Inglis. W & R. Chambers, London and Edinburgh.

『帳合之法』のオリジナル・テキストとして、わが国にもよく知られているブライヤント・ストラットンの簿記書は、前掲の Common School Book - Keeping (Common School edition) のほかに、High School edition と Counting House edition があり、また、これら3部作の新訂版もある。フル・タイトルを示そう。

Bryant & Stratton's National Book - Keeping : an analytical and progressive treatise on the science of accounts and its collateral branches ; prepared as a book of reference for the counting-house, and also a text-book in high school and academies. N. Y. 1860. (High School edition といわれる)

Bryant & Stratton's Counting House Book-Keeping : containing a complete exposition of the science of accounts, in its application to the various departments of

business ; including complete sets of books wholesale and retail merchandising, farming, settlement of estates forwarding, commission, banking, exchange, stock brokerage, etc., etc., 1863.

これらの新訂版は、次のとおりである。

The New Bryant and Stratton Common School Book - Keeping ; etc., By S. S. Packard, and H. B. Bryant. 1878.

The New Bryant & Stratton Counting House Book-Keeping ; etc., By S. S. Packard. and H. B. Bryant. 1878.

The New Bryant & Stratton High School Book-Keeping ; etc., By S. S. Packard and H. B. Bryant. 1881.

Common School edition の場合は and, High School edition と Counting House edition の場合は &, を使い分けているほか、新訂版では、いずれも、Stratton's でなく単に Stratton とあり、また、共著者 (joint authors) の中から Stratton (Henry Dwight Stratton, 1824~67) がぬけており、かつ、共著者の筆頭に Packard (Silas Sadler Packard, 1826~98) の名がみえている。Bryant (Henry Beadman Bryant, 1824~92) はそのままである。

この新訂版の時期 (1878, 1881) には、Stratton は歿している。旧版・新訂版ともに、その実質的な執筆者 (すくなくともその中心人物) は、Packard のように思われるのだが、確証は得ていない。

以下、『帳合之法』と Common School edition をみながら、帳簿組織をみていこう。

Set I. Set III. および Set IV. に示された帳簿組織は、次のようになっている。

Set I. ……日記帳 (Day Book), 仕訳帳

(Journal), 元帳 (Ledger) の 3 主要簿制 (*tre libri principali*) を中心としたいわゆる伝統的なイタリア式 (ベニス式) である。専門家の中には、皮肉っぽく、‘the old-fashioned trio’ という人もいる。福沢の訳書では、日記帳、清書帳、大帳と訳した。大帳つまり the great book という用語は、大陸系の用語で、*grand livre* (仏), *libro grande* (スペイン) などという。イタリア語では、*quaderno* もしくは *quaderno grande*, *libro grande* である。

Set III. …… Day Book and Journal combined とあって、仕訳日記帳制 (Journal Day Book, Waste Book and Journal と同じ) を採用している。

Set IV. …… 仕訳帳、現金出納帳、売上帳および元帳という組織となり、現金出納帳では商品勘定欄と諸口欄とを区別した多桁式、売上帳では現金勘定欄と諸口欄とを区別した多桁式の様式を採用し、これら複数の原初記入帳 (books of original entry, the original books of entry) から直接的に元帳に転記するプラン (the plan of posting directly), つまり direct sources of posting となっている。総合仕訳帳制、例えば、月次総合仕訳のような手続 (monthly journalizations) は採用していない。

イタリア式 (ベニス式) といいならわされた古典的・伝統的な簿記では、とくに主要簿制にみられる単一仕訳帳制が定型化しており、『簿記テキスト』の牢固たるひとつのパターンとなってきた。とくに、米国およびその影響下にあった明治簿記書においてしかり。わが国の場合、その余燼は実に今日に及んでいる。明治も比較的早い時期に (およそ10年代とみているが) 伝票制をスタートさせ、大正末年頃までに完全に伝票式の帳簿組織、とくに、分離式振替伝票制と一科目一伝票制の採用による伝票式月次総合仕訳帳制、最も一般的には、伝票→伝票集計表→元帳、あるいは複写伝票

制等、を確立している実務界と、*il costume di Venetia* 「ベニス式」の桎梏からぬけきらぬ千篇一律たる『簿記テキスト』との乖離は、実に明治初期にはじまり今日に及んでいるといっても過言ではなからう。

わが国で最初の簿記書『帳合之法』のオリジナル・テキストとなったこの簿記書の帳簿組織 (ないしその解説の仕方) について、看過し得えない重要な点がある。それは、既述の Set I, Set III, Set IV. の解説にみられるように、ある種の発展段階的な、いわば多層的な仕組 (の解説) になっていることである。米国で最初の簿記テキストであるミッチェル (William Mitchell, 1763~1854) の A New and Complete System of Book-Keeping, by an improved method of Double Entry; etc. が Philadelphia で出版されそのは 1796 年であり、この18世紀末頃までには、すでに前稿『英国古典簿記書解題』で詳論したように、英国 (語) 簿記書の水準は相当高くなっている。ハミルトン (Robert Hamilton, 1788, 初版は1777) やブース (Benjamin Booth, 1789) をみれば、この事実は明瞭である。そこで、過去の帳簿組織の発展、例えば、仕訳日記帳制、多桁式仕訳帳制、あるいは複合 (分割) 仕訳帳制等をすべて網羅的に取り入れて、多層的に帳簿組織を論ずる (あるいは数示する) といったタイプの『簿記テキスト』が米国で出現する意味も充分理解できる。けれども、こういった『簿記テキスト』の定型化が、永くつづく、あるいは、この傾向が益々増幅されるということになると、これは問題であると思う。米国の簿記書を下敷にして書かれたわが国の簿記書の内容、とくにその帳簿論の箇所をみると、今日のものもそうだが、単一仕訳帳制、つまり、最も古典的なイタリア式簿記のいわゆる *tre libri principali* にはじまり、実に変わりばえもせず、多桁式仕訳帳制、複合仕訳帳制、総合仕訳帳制、あるいは現金式仕訳帳制、支払証憑記入帳制、

といった種々のタイプの帳簿組織を並記して
だらだらと解説している。ひどいのになると、
明治初年以來の簿記実務を支配してきた伝票
制（3伝票制）については、まったくふれて
いないか、あるいは申し訳程度にふれてい
るものがある。しかも、多くの場合、振替伝
票の解説には、不適当な取扱いないし原理的
な誤りを犯しているものすら少なくはない。
振替伝票のルーツにかかわる重要な点である
が、ここでは、あえてふれない。いずれにし
ても、米国型の『簿記テキスト』が、わが国
に与えた悪い影響の一典型である。

もっとも、わが国の特殊事情が、かかる
『簿記テキスト』の定型化を一そう増幅させ
たことも事実である。それは何かというと、
一方には、明治5年以來の「学制」にはじま
る教育制度が、初中等教育には不必要なほど
（その理由は必ずしもつまびらかでないが）簿記教
育に熱心であったこと、他方には、これも理
由ははっきりしないが、「巡查や裁判所書記
その他の判任文官の採用試験等の課目中も
（簿記が）加えられてゐた」（岡田誠一氏稿『明
治簿記学史断片』より）ため、簿記書そのも
のが、実務の指導書というよりも、多くの場
合、テキストないし受験参考書として執筆さ
れたためである。判任文官の採用試験課目に
簿記が加えられていたことについて、あえて
ひとつの推測をいえば、明治8年末頃にはじ
まり明治22年までの、官庁（道府県をふくむ）
の金銭会計（一般会計）では、複式簿記が採
用されていた、あるいは、法令・規則をもっ
て強制的に採用させられていたという事実を
指摘しておこう。

マルシュの前掲書 *The Science of Double-Entry Book-Keeping, etc.* の背のタイトルは
Marsh's Course of Book-Keeping とある。
『馬耳蘇氏記簿法』あるいは『馬耳蘇氏複式
記簿法』といった邦文タイトルの由来であろ
う。

内容的にみると、諸般の点で貧弱なもので、
彼のいう原理（Principles）といっても、擬人
説ないし人格説で、字義どおりの Debitor,
Creditor にこだわった解説に終始している
ような有様である。その帳簿組織にしても、
例の伝統的な3主要簿制（Day Book, Jour-
nal, Ledger）を中心とし、若干の補助簿に言
及しているにすぎない。その邦訳を文部省が
刊行しているからいうわけでもないが、内容
的にみて、ごく初歩のテキスト向といった感
が深い。

『帳合之法』と『馬耳蘇氏複式記簿法』と
のこの2種の米国簿記書の邦訳書は、明治初
期の最も代表的な簿記の教材であった。良い
意味でも悪い意味でも、まさしく、それにふ
さわしい内容をもっていた。

『商家必用』、この英国簿記書の邦訳書は、
わが国の簿記の教材として広く用いられたと
いう事実もないし、またおそらく、あえてい
えば、当時としてみた場合、内容的にみて簿
記の教材としては不向きであったとも思われ
る。つまり、小冊子ではあるが、内容のレベ
ルが高いのであり、多層的につみ上げて解説
するといったテキスト的な手順をふんではい
ない。『チェンバース教育叢書』の1巻とし
て出版されたものではあるが、あえていえば、
「教育」ということの意味や本質あるいはそ
の手順といった諸点で、米国やその影響下に入
った日本（すくなくとも当時の両国）とは、
異なった立場にたっている。「簿記の教育」
といった実利的なものは、事柄の性質からい
って、その当時の最も実践的でポピュラーな
ものを教えればよいのであって、あえて、数
百年も前の例のイタリア式簿記から順をお
って教えなくてもよい、イングリシ簿記書は、
まさに、かかる立場にたっているといえない
だろうか。一般的にみて、英書には、かかる
傾向が顕著である。

筆者は、もう大部前になるが、共著で『会
計学』を執筆し、巻中の簿記と原価計算の部

分を分担させられ、大変にとまどった経験がある。日本の簿記書と原価計算関係の書物ぐらい実務から乖離している例は、珍しいからである。

イングリシ簿記書の主内容については、前稿を参照されたい。

筆者は、これまで、『簿記テキスト』（教材）という角度から、明治以来今日に及ぶわが国の簿記書について、批判ないし非難めいたことをのべ立ててきたが、この命題は、実は、今日の学校（大学をふくめて）での簿記教育ないし簿記教授法とも深くかかわってくるものである。むしろ、今日の簿記教育の姿勢や各種の資格試験の出題傾向が一変すれば、簿記書の内容やその教授法などは、直ちに改められることであろう。

つまり、事柄の性質上、幸いにも、「百年河清を待つ」といったものではないのである。あるいは、こういう論もあるかも知れない。いわゆるイタリア式簿記、数百年も前の、しかも一部の専門家の意見では（筆者もその一人だが）、明らかに当時の実務のレベルからすでに立ち後れていた簿記、これは、簿記の初歩の教育ないし簿記の基礎（あるいは基礎的原理）の教授には向いているのだと。筆者をしてあえていわしむれば、俗耳に入りやすいこの論は、甚だしい独断に満ちているように思う。場合によっては、簿記書の執筆者（つまりその多くは教師であろうが）の、逃げ口上であるかも知れない。かつて、英国古典簿記書の中でも、「今日の簿記書の著者達は、実務からえた知識で執筆しているのではなく、互に書物をコピーしあっている」といった痛烈な論評がみられた。今日のわが国に通用せねば幸いである。

Ⅳ 元帳の総括および次期開始記帳について

元帳の総括（balancing and ruling）およ

び次期開始記帳に関しては、前稿までに折にふれて沿革的・発展史的な角度を加味して論じてきたが、本項では、仮設例により、具体的に補筆・検討しておこうと思う。

すでに論じておいたように、名目諸勘定については、「締切」（closing）の「記入」（entry, entries）が適用され、損益（集合）勘定口座に振替られると同時に、個々の名目諸勘定口座は、締切られて消滅する。損益勘定口座の貸借差額は、資本（主）勘定口座に振替えられた後に、この損益勘定口座も締切られて消滅する。かくて、この一連の手続きは、文字通り「締切」の「記入」、つまり、closing entry (entries) に外ならない。

名目諸勘定の締切後の資本（主）勘定や債権・債務諸勘定のような人名勘定をふくむ広義の実体（在）諸勘定は、そのまま次期に継続して引きつがれていくものであるから、次期への記録の継続性とその正確性を、何らかの形で保障できるような体制さえととのえられていけばよいわけで（その方法としては、繰越試算表による検証で充分である）、元帳面の各口座の記帳は、原理的には、そのままでよい筈である。つまり、元帳の実体（在）諸勘定口座の面でいわゆる「締切」り、かつ、「繰越」すという二重の手間をかける必要性も必然性もないのである。一般的かつ慣習的に、元帳面で、この「締切」りかつ「繰越」すという手続きをとる場合でも、すくなくとも、この場合に、「締切記入」（closing entry）という概念・用語を無神経に使うべきではあるまい。英語簿記書の中で、closing entry とせずとくに balancing and ruling entry としているものがあるが、もっともな配慮であると思う。closing entry とは、専ら名目諸勘定にあてはまる概念である。

以下の論述では、一般的かつ慣習的に、この実体諸勘定の balancing 「総括」を行ない、かつ、次期々首の開始記帳を行なうという前提で話を進めることにする。

実体諸勘定の残高が、次のとおりであったと仮定する。

現金	5,000	乙商店 (掛買)	4,800
甲商店 (掛売)	7,500	借入金	3,500
受取手形	3,000	支払手形	4,200
商品 (繰越高)	4,500		
備品	2,000		
家屋	1,500	純資本: net capital (13,500)	
土地	2,500	(資本主何某)	

残高勘定 (Balance account) を開設し、仕訳帳で「仕訳」をし、元帳の残高勘定へ転記したとすると、次のようになる。

仕 訳 帳	
(借方)	(貸方)
残高勘定 26,000	(諸 口)
	現 金 5,000
	甲商店 7,500
	受取手形 3,000
	商 品 4,500
	備 品 2,000
	家 屋 1,500
	土 地 2,500

(借方)	(貸方)
(諸 口)	残高勘定 26,000
乙商店 4,800	
借入金 3,500	
支払手形 4,200	
資本 (主) 13,500	

元 帳			
(借方)	残	高	(貸方)
現 金 5,000		乙商店 4,800	
甲商店 7,500		借入金 3,500	
受取手形 3,000		支払手形 4,200	
商 品 4,500			
備 品 2,000			
家 屋 1,500			
土 地 2,500		資本 (主) 13,500	
	26,000		26,000

あるいは、

(借方)	残	高	(貸方)
(諸口) 仕訳帳により (per J.) 26,000		(諸口) 仕訳帳により (per J.) 26,000	

次期開始記帳に際して、同様に残高勘定を開設したとすると、その仕訳帳面と元帳面の記帳は、貸借の位置が逆に (reversed) なるだけで、内容的には同一である。そこでもし、*per J.* (諸口) として合計額 (等額) を残高勘定口座に示すとしたら、こうなる筈である。

(借方)	残	高	(貸方)
³ / ₃₁ (諸口) 26,000		³ / ₃₁ (諸口) 26,000	
⁴ / ₁ (諸口) 26,000		⁴ / ₁ (諸口) 26,000	

残高勘定口座の記帳を (諸口) として合計額で示すとすれば、これは明らかに残高勘定のもつ伝統的な機能という面からみれば当該勘定の形骸化に外ならないと思うが、いわゆる締切と繰越とを通じて、残高勘定口座は、かくの如き (等額の数字が四つ並ぶというだけの) 殆ど無味乾燥な内容となる。英米の簿記書にも、このような残高勘定の例がみられる。

あるいはこう反論されるかも知れない。閉鎖・締切には閉鎖残高勘定を、繰越・開始には開始残高勘定をそれぞれ開設する筈だから、こうはならないと。しかし、残高勘定をかくも両建にしたからといって、事柄の性質ないし実質そのものは、依然として変らない筈であるし、もともと、筆者がみてきた英国古典簿記書は、初期のものが明らかに大陸簿記 (書) の影響下に、次期開始記帳にも残高勘定を用いた例はあるが、この場合でも、とくに the closing Balance account, the opening Balance account, という名称は用いていない。一律にただ Balance account である。つまり大陸簿記 (書) の *Bilancio d'apertura* (the opening Balance account) を、名称で区別して使うという方式は採用されていない。のみならず、既述したように、多くの場合では、次期開始記帳は、残高勘定ないし開始残高勘定ではなくて、資本 (主) 勘定を相手科目として仕訳し、転記するという方式となっている。次のとおりである。

仕 訳 帳

(借方)		(貸方)	
(諸 口)		資本 (主)	
現 金	5,000		
甲商店	7,500		
受取手形	3,000		
商 品	4,500		
備 品	2,000		
家 屋	1,500		
土 地	2,500		

(借方)		(貸方)	
資本 (主)		(諸 口)	
	12,500	乙商店	4,800
		借入金	3,500
		支払手形	4,200

元 帳

(借方)		資 本 (主)		(貸方)	
乙商店	4,800	現 金	5,000		
借入金	3,500	甲商店	7,500		
支払手形	4,200	受取手形	3,000		
		商 品	4,500		
		備 品	2,000		
		家 屋	1,500		
		土 地	2,500		

あるいは、

(借方)		資 本 (主)		(貸方)	
(諸口) 仕訳帳により (per J.) 12,500		(諸口) 仕訳帳により (per J.) 26,000			

(借方)		資 本 (主)		(貸方)	
		(net)		13,500	

残高勘定（両建の場合も原理的には同様）を用い、かつ、合計額（等額）を（諸口）として示すと、形式的にあるいは殆ど無意味に等額が四つ並ぶということになれば、そもそもは残高勘定を相手として仕訳（閉鎖仕訳と開始仕訳）をするからなので、それならば、というわけで、次のような仕訳帳面の記帳が

考えられることになる。当然の成行きである。

仕 訳 帳 (閉鎖)

(借方)		(貸方)	
乙商店	4,800	現 金	5,000
借入金	3,500	甲商店	7,500
支払手形	4,200	受取手形	3,000
資本 (主)	13,500	商 品	4,500
		備 品	2,000
		家 屋	1,500
		土 地	2,500

仕 訳 帳 (開始)

(借方)		(貸方)	
現 金	5,000	乙商店	4,800
甲商店	7,500	借入金	3,500
受取手形	3,000	支払手形	4,200
商 品	4,500	資本 (主)	13,500
備 品	2,000		
家 屋	1,500		
土 地	2,500		

わが国の一般の簿記書で、今もって行なわれている例の「大陸式決算法」・「英米式決算法」（用語としては、「大陸式」・「英米式」といういい方もおかしいし、「決算法」という大袈裟ないい方もどうかと思う。もともと内容的には実体諸勘定の総括に関する手続きなのだから）について再考する場合、以上のような経緯をよく検討しておくことが必要である。ここまでくれば、閉鎖・開始の記帳につき仕訳帳を通さない方法、つまりいわゆる「英米式決算法」は目前となる。さらに、いわゆる「英米式決算法」にいつそう徹するというのなら、むしろ、さらに一步を進めて、「締切」・「繰越」をしない方法の採用を指向すべきである。このことは、元帳の様式とも関係がある。いわゆる標準式 (T form) の採用を前提としているから、「差額を貸借の少ない金額の側に赤インクで追計して貸借のバランスをとって口座を締切り……」といった暢気なことがいってられるわけで、残高式（実務、とくに英国や明治初年以来その影響下にあった日本の実務では、

圧倒的にこの形式を採用している)を採用している場合では、かかる説明それ自体、ひいては、締切・繰越という二重の記帳それ自体が、まったくナンセンスとなる。

V 著者名等の呼称(カナ文字表記) およびタイトル・本文のスペリ ング等について

著者名あるいは簿記書に記述されている人名等について、その呼称を片仮名で表示する場合、どうも自信のないものが多くて、申し訳ない次第である。典型的な若干の具体例をあげよう。

1635年に *The Merchants Mirrour ; etc.* を刊行した Richard Dafforne の場合、ダフオーンなのかダフォルネなのか。日本の専門家の中にも、ダフォルネとする人もいるくらいであるから、どうもまどわざるを得なかった。たしかに、大陸的な呼称では、ダフォルネの方が正しいかも知れない。事実、17世紀前半の英国の時代的背景を考えると、そうも思われる。論集に前掲論文(1)の発表を考えて原稿を整理していた頃、たまたま、David Murray, *Chapters in the History of Book-keeping Accountancy & Commercial Arithmetic*, 1930 (reprinted by Nihon Shoseki, Ltd., 1977) の 245 頁に次の記事をみた。

To the *Mirrour* there is appended a number of Interest and other Tables, and a note upon Numeration and Multiplication by John Dafforn, the son of Richard, adressed "To the Art-Aspiring Youth." The tables are useful and creditable to the author, who was only 16 - he reckoned from his birth year until the date of writing, 4 times 4 years. He drops the "e" from the end of the surname.

息子 John Dofforn の代になって、Dafforn

とあるので、これは、ダフォルネとはよみ難いから、まあ、ダフオーンでよいわけであろう。なお厳密にいうと、なぜ息子の代に "e" をとったかが問題で、およそ次のケースが推量できる。どちらとも判断はつきかねる。

(i) Dafforne 家は、もともと大陸からの移住者であったので、ダフォルネと自称していたが、次第に英国風にダフオーンとよぶようになった。そこで、そのよび名に合せて、John (the son of Richard) の代に、綴りとよび名を揃える目的で "e" をとってしまったのである。

(ii) Riched Dafforne の代までは、ダフォルネと称していたが、John の代になって、英国風にダフオーンと称することにした。そこで綴りもそれに合せたのである。

(iii) 往時の英語綴りでは、後述のように、末尾に発音とは無関係に "e" とをつけることが多い。例えば、learn を learne, know を knowe のように。そこで、一貫して呼称としては、ダフオーンであり、ダフォルネではない。

もっとも、ダフオーンの第2の簿記書 *The Apprentices Time-Entertainer accomptantly ; etc.* の第3版が1670年に息子の John によって刊行されたが、そのタイトル・ページの末尾には By JOHN DAFFORNE とある。

このほか、Stephen Monteage (1682, 第2版), S. W. Crittenden (1850, 1853, 米国) など、なかなか、片仮名で表記するとなると、自信がない。

Hustcraft Stephens (1735 in London, 1737 in Dublin) なども困った一人である。はじめステファンズとしたが、ステフェンズ、ステフェンスとも考えられる。これも、たまたま、外国の(多分アメリカの)テレビ・ビデオをわが国の某局が深夜に流していた。何となくみていると、ボクシングの試合で、一方の選手名が Stephens と画面に出てきた。そ

こで、アナウンサーの放送に耳をこらして聴いていると、日本人アナウンサーの声では、ステファンズといったりステフェンス（ズ）といったり、どうも統一がとれていない。バックに流れているアメリカ人（多分）のアナウンサーの声を耳をこらして聴いてみると、はっきりしないが、ステフェンスときこえる。随分迷ったが、論文ではステファンズとしたのを拙著では、結局、ステフェンスになおしたような次第である。これは、改悪かも知れない。

W. Inglis (1849?) のような場合は、イングリシスでよいと思う。Inglis と誤って表記してある著名な本もあるが、これなどは English を連想し、うっかりした誤りであろう。

English が出たので、いっておこう。英国で最初の簿記書といわれている例の Oldcastle=Mellis (1543=1588) の簿記書のタイトルの末尾に、and in Englishe Debitor and Creditor とある。Englishe と “e” が末尾につく。今日の目からすると、いらない “e” がやたらにつく。famouse とか、learne あるいは knowe, reconynge (reckoning) 等この本のタイトルだけみても相当に多い。最後の reconynge などは古い綴り方なので益益ややこしくなる。このほか、cash を cashe, stock を stocke のようなケースもみられる。そうかと思うと、ダフォーンの前掲書（例えば第62項の有名な仕訳の Rules）をみると、money の綴りは、悉く mony とあって、e がぬけているといった有様である。

また、参考文献によって人名の綴り方に相違が（あるいは明らかな誤りが）みられる。ややオーバーだが、枚挙にいとまがない。

ピリオッドやコンマの打ち方、大文字・小文字の使い分け、書体等に至っては、古今の多くの会計史家（英米の）の間で、大雑把というか支離滅裂というか、收拾がつかねる状態にある。正誤表をつけたいくらいである。

筆者の場合は、大原則として、よしんば文

法上・表記上おかしくとも（現代英語と綴りが違うのは、あたりまえである。為念）、原典のままで引用してある。極端な例をあげると、account, これは往時はたしかに accompt と書いた。ところが中には accōpt と綴った簿記書がある。このような場合は、忠実に accōpt としてある。

さらにいえば、おおむね17世紀頃までの初期の簿記書（簿記書とは限らないが）の活字ないし活字組みにも問題があつて、思わぬことから後世永く間違いを引きついできたような例がある。その典型は、1632年に刊行された *A Most Excellent Instruction for the exact and perfect keeping Merchants Bookes of Accovnts, by vvay of Debitor and Creditor, after the Italian manner: etc.* にみられる。

もともとこの簿記書のタイトル・ページには著者名が By I. C. Gent. とあるので、英米の有名な『書目』や会計史文献では、これでとおっている。ところが、当時では、また、この簿記書では（でも）、I と J, あるいは u と v とはしばしば混用されている。前掲のタイトルでも、すでに Accounts ではなく Accovnts とあり、way ではなく vvay とある。1567年のウェディントン の簿記書のタイトルでも、known を knovvn, Weddington を VVeddington, newly を nevply, あるいは Andwarpe を Andvvarpe としている。もっとも w は double “u” であるが、フランス語では double “v” であるが。さて、前掲の I と J の場合では、例えば Journall とすべきところを Iournall, James とすべきところを Iames とある。従って、I. C. Gent ではなく J. C. Gent ではないか、という疑問がおこっても不思議ではないのだが、そして、実は、J. C. Gent, John Carpenter が正しいのである。英蘭勅許会計士協会蔵有本のゼロックス版をよくみると、By I. C. Gent という活字のすぐ上のところに、細かい小さな

肉筆で *By J. Carpenter Gent.* という書きこみがある。この外、ほとんど決定的な証明としては、同時代の1635年刊行のダフォーンの簿記書の冒頭の *Ralphe Handson Accountant, touching the Author as his Work* の一節に、*John Carpenter* の名が掲示されている。今日の『書目』で、*J. C. Gent* とあるものも認められるが、なお、*I. C. Gent* と誤っているものも少なくないので、あえて明らかにしておく。

初期の代表的簿記書である イムピン (*the English version, 1547*)、ピール (1553, 1569) ウェディントン (1567)、メリス (1588)、これらは、いずれも、黒体文字 (活字) *Black Letter* を用いている。並活字組の場所も少しはあるが。この種の研究で最も難渋したのは、この点であった。印刷術が未熟で不鮮明なところへもってきて、この黒体文字というわかり難い書体の活字組では、見ただけでうんざりであった。しかも、これがそもそも調査研究の冒頭にぶつかる問題だけに、意欲をそがれることおびたしい。ところが、捨てる神あれば助ける神ありで、これらについては、全部にはないがカツの次掲の現代英語綴り (勿論、並活字組) の抄録が発表されており、大助かりであった。

P. Kats, Hugh Oldcastle and John Mellis - |, ||, March 1926, *The Accountant*.

P. Kats, *The "Nouvelle Instruction" of Jehan Ympyn Cristophle* - |, ||, August 1927, *The Accountant*.

P. Kats, James Peele's '*Maner and Fourme*' January 1930, *The Accountant*.

英米の『書目』や会計史文献でみるのに、著者名、刊行年次、タイトル (細かいことをいえば、大文字や小文字の使い分け、ピリオッド・コンマの打方等もふくめて) 等に不統一というか食違いが目立つ。中には、全くの誤りといった例も少なくない。そして、場合によっ

ては同一の誤りがくりかえされているところをみると、どうも「孫引き」臭いところもあり、著 (編) 者自身で調べていないと推量される場合も間々ある。原典 (そのゼロックス版) を見る機会に乏しかった当時の事情からは無理もないが、今後の問題としては、大規模な「正誤表」でも作っておかないと、困ったことになると思う。前掲の『学習院学術研究叢書』として刊行した『拙著』では、できる限り誤りを指摘してはおいしたが、余り細かいことまで立ち入るのは避けた。内心では、「正誤表」のようなものをつけて、諸文献の誤りを悉く指摘しようかとも思ったが、諸文献からこうむった大きな恩恵を考えると多少の遠慮もあり、また、時間的な余裕もなかったので、この計画はとりやめた。

VI Bookkeeper か Accountant か

Bookkeeper というと、いかにも古めかしくきこえ、*Accountant* というと、モダンなひびきをもっているようにも思われるが、実は必ずしもそうではない。昔から *Accountant* (往時のスペルでは *Accomptant*) という名称は使われている。ついでながら、*accounting* という用語も、一般的とはいえないが、相当古くから使われており、1714年に刊行の *The Gentleman Accomptant : etc., Done by a Person of HONOUR*. Londonでは、しばしば *accompting* として出てくる。この匿名の貴族は、Dudley North の末子の Roger North (1653~1734) であると伝えられている。

さて、*Bookkeeper* と *Accountant* (*Accomptant*) であるが、筆者の結論をいうところである。

Bookkeeper の方は、*bookkeeping* (帳合、帳づけ) をする人、つまり簿記係で、仕事、任務の内容に即した職名といえる。ところが *Accountant* の方は、他人がある種の「評価」

ないし「価値判断」をもっている呼称である。卑近な例でいうと、「教師」と「先生・学者」というような場合と同類である。教師といえは文字通り教える人間、それを職業とする人間である。先生の方は、昨今、とみに意味合が変化し、紅燈の街などでは、瘦せた人は先生で、肥えた人は「社長」ということになるらしいから、この際、除外しておいて、学者についていうと、これは、他人がある人物に対して、評価ないし価値判断をこめて「あの人は学者である」という。昨今は、日本語が乱れてきているから、大学の「教師」などが、自ら、学者・文化人グループなどといってみたり、吾々学者の立場としては、なぞとおよそ「学者」とも思えぬ連中が高言する始末である。甚だこっけいである。学者かどうかは、他人様がきめてくれる事柄である。

Bookkeeper に対して、Accountant であるかどうかとも亦、他人様がきめてくれるのが本来である。

しからば、何が Accountant たりうる要件なのか。少々まわりくどいが、account という基幹となる言葉から追求してみよう。

account は、計算、説明という意味のほか、簿記では計算単位を意味し、「勘定」と訳されている。簿記原理という意味をあらわす場合に、the science of accounts, the philosophy of accounts などといった例もある。定

冠詞をつけ複数形にして the accounts という、とくに英国では、会計報告書類、財務諸表 (the financial statements) のことをいう。わが商法でいう「計算書類」を官版英文日本商法では the accounts と訳している。

そこで、Accountant といえは、第1には、calculator と考えるのが最も自然であろうから、a good bookkeeper is to be an expert accountant. といえは、「計算に堪能」といった意味合いが濃い。この場合の計算というのは、単なる加減乗除をいうのではなく、多種の貨幣（しかも故意の磨減や改鑄のある clipping & debasing）による取引を基準貨幣に換算して表示する能力を意味したのである。この能力にひいていることが、Bookkeeper が Accountant たりうる要件のひとつであった。

ピール (James Peele) の簿記書 (1553) の仕訳帳 (仕訳日記帳) の冒頭を下に示す。

Accountant たる第2の (むしろより重要な) 要件は、one who is accountable である。その意味は、「信頼のおける人物」、もっと具体的にいうと、「自ら正確に account for (申し開き、説明) ができる人物」ということになる。「資本主、資本拠出者達」に対して、Bookkeeper は「説明して納得してもらう」必要がある。納得できるような正確で十分な説明をしうる能力のある人が、Accountant

JOURNAL A.D.M.L.III. THE XXV MAY

				l	s	d
1	Thus enter money out of the Inventory in the Journal	$\frac{1}{2}$	Money is debtor to Stock belonging to me Fraunces Bonde, grocer of London, and is for 270 Angels, valued after 10s, the Angel, which amounts unto 135 <i>l</i> . I say	135		
		$\frac{1}{2}$	Money is debtor to Stock and is for 48 ryals valued at 15 <i>s</i> . the ryal, which amounts to 36 <i>l</i> .	36		

なのである。ここに会計の中核的イデオロギ
ーが生まれる。それを accountability「会計
責任」という。より正確に言えば「会計上の
受託管理責任」である。一般の用語としても、
この accountability が用いられるが、その
場合には、明らかに responsibility（責任）
というよりも、もっと前向きの強い意味に用
いる。response「答える、反応する、応答す
る」から出た responsibility は、やや消極的
なニュアンスがあるように思える。accounta-
bility は、「責任」というよりも、むしろこ
の場合では、「責務」・「積極的に責任をまっ
とうすべき義務」といった方がよいかも知れ
ぬ。あるいは、単に前向きとか、積極的とい
う意味合に止まらず、「対社会的な」責務と
いった方がよいかも知れない。

VII 押韻の仕訳ルール

マレー (David Murray) の『前掲書』
(p. 182) には、一般にパチオリ(あるいはパチオ
リ派)の最も有力な後継者と目されているマ
ンゾーニ (Domenico Manzoni, *Quaderno
doppio col suo giornale, ……*, secondo il
costume di Venetia. 1543) にみられる次掲
の押韻の仕訳ルールを引用している。風雅な
ものである。

英米古典簿記書にも、初期のものはいうま
でもなく、前世紀になってからでも、類例が
みられる。

以下、その実況を紹介しておこう。簿記書
名等はその都度付記してあるが、ここで予め
(Domenico Manzoni,, 1534)

Nota, che la Regola del Giornale & Quaderno,
in se contiene sei cose, cio è,
Dare, Hauere, Qualità, Quntità, Tempo, & Ordine,
Dare, significa douer dare, cio è il debitore, ò uno
ò più che siano,
Hauere, uuol dir douer hauere, cio è il creditore,
ò uno, o più che siano. (マレーの『前掲書』182頁より)

(James Peele, 1553. 第12丁)

Rules to be ob=
served.
If that in this accompt, these preceptes ye observe,
then I you wel assure, no part therof shall swerne.
To make the thinges Receiuyd, or the receiver,
Debtor to the thinges delivered, or to the deliverer.
And to receive before you write, and write before you paye,
So shall no part of your accompt, in any wyse decaye.
Observe wel these few rules, your Iournall boke throughout,
So shall you make sure worke of that you go about.
I. P.

(Richard Dafforne, 1635.)

In Briefe

The Ower, or the Owing thing,
Or what-so-ever comes to thee :
Upon the Left-hand see thou bring ;
For there the same must placed bee.

But

They unto whom thou doest owe,
Upon, the Right let them bee set :
Or what-so-e'er doth from thee goe,
To place them there doe not forget.

(P. Deighan, 1807. p. v)

"By Journal laws, what we receive
"Is Debtor made to what we give ;
"Stock for our debts must Debtor be,
"And Creditor by property :
"Profit and Loss accounts are plain,
"We debit Loss, and Credit gain."

(I. Mayhew, 1851. Art. 273~80)

"By Journal laws what you receive.
Is Debtor made to what you give.
Stock for your debts must Debtor be,
And Creditor for property.
Profit and Loss Accounts are plain ;
You debit Loss and credit Gain."

一覧にして示しておく。

Domenico Manzoni, Quaderno doppio etc., 1543

James Peele, *The maner and fourme etc.*, 1553

Richard Dafforne, *The Merchants Mirrour : etc.*, 1635

P. Deighan, *A Complete Treatise on Book-Keeping, etc.*, 1807

I. Mayhew, *Mayhew's Practical Book-Keeping etc.*, 1851. Boston

ディーガン (1807) と米国のメイヒュー (1851) とは、ごらんのように殆ど同じ文で、we が you に、our が your に、by が for に変わっているだけである。どうも、メイヒューの場合は、ディーガンあたりが（あるいはそれ以前、以後にも類例があるのかも知れないが）種本ではあるまいか。

VIII 仕訳帳金額欄の変遷と問題点

世間でいういわゆる「ベニス式」(*il costume di Venetia*) の簿記あるいはイタリア式簿記といわれているものの特色は、日記帳 (当座帳) *Memorandum* (Waste Book), 仕訳帳 *Giornale* および元帳 *Quaderno* からなる 3 主要簿制 (*tre libri principali*) にあるとされている。後世、*'the old-fashioned trio'* とよばれた有名な帳制である。

一部には、この帳制は、当初から（つまり、パリオリの時代から）実務からは立ちおくれたものであったとか、あるいは、極めてローカルなものであるにも不拘、すくなくとも『簿記テキスト』の上では、普遍的原理にそくしたものであるかのように一般化したといった批判がみられた。

注目すべき批判ではあるが、本項では、とくにこの帳制での仕訳帳、つまり、単一仕訳帳制をひとまず前提とした上で、この簿記の

テクニカルな側面を代表するこの帳簿での金額欄の問題についてだけを取りあげ、まとめて論じておくことにする。前稿までに折にふれて言及してはあがあるが、ここで、筆者の所見を単刀直入に申しのべたいと思う。

明治初年以來、主として米国の簿記教科書、とくに初級向のテキストの訳書や、あるいはそれらを種本にして出来上っている邦文簿記書では、この「ベニス式」が金科玉条の如く尊重され、また、かかる帳制が簿記教育の礎石となってきた。今日でもこの伝統は、実に（あきれるほど）忠実に、守られている、ここでは、簿記教育論に立ち入っては申しのべないことにしよう。問題は、仕訳帳ないし仕訳日記帳の金額欄の形式がどうであるかである。

今日の簿記書の殆どすべて（あるいは、すべてといってもよい）では、次頁上段のような仕訳帳（仕訳日記帳）を冒頭に掲げて解説を始めるのを常道としている。

ここで、予めはっきりしておかねばならぬ問題がある。それは *double entry* (複式、複記入) ということの意味 (内容) である。これは自明のことで、今さららしく議論する必要がないとも考えられるが、本項の命題に関していえば、ここから問題にしないと一歩も先へ進まない。結論をいそぐ。*double* (複) *entry* (記入) とは、手続的にみると、元帳勘定口座面において、取引の記帳に際し、ある勘定口座の借方記入は、必ず等額をもって他の勘定口座の貸方記入を伴うということである。而して、この記帳につき、勘定記帳のルールをめぐり、擬人 (人的) 説、物的 2 勘定説あるいは収支説等がつぎつぎに登場した。これらが、いわゆる勘定学説 (*theory of double entry*) である。

簿記の学習においては、そのテクニカルな側面を代表するいわゆる「仕訳」に重点がおかれてきた。そのため、「取引の仕訳を示せ」といった仮設例が練習に反復されるのを通例とする。そこで学習者は、例えば開業仕訳に

仕 訳 帳

月 日	摘 要	元 貢	借 方	貸 方
3 1	(現 金) (建 物) (資 本 金) 開 業	(1) (5) (7)	10,000 00 20,000 00	30,000 00
" 2	(当座預金) (現 金) A 銀 行	(2) (1)	5,000 00	5,000 00
" 3	(仕 入) (買 掛 金) 甲 商 店	(8) (6)	20,000 00	20,000 00
" 4	(売 掛 金) (売 上) 乙 商 店	(3) (10)	15,000 00	15,000 00
" 5	(営 業 費) (現 金) 事務用品	(9) (1)	2,000 00	2,000 00
" 6	(現 金) (受取手形) (売 掛 金) 約手 No. × ×, 乙商店	(1) (4) (3)	10,000 00 5,000 00	15,000 00
" 7	(買 掛 金) (当座預金) (現 金)	(6) (2) (1)	15,000 00	3,000 00 12,000 00
			102,000 00	102,000 00

つき、

(借方) 現金 5,000 (貸方) 資本金 5,000

あるいは、

現金 5,000 // 資本金 5,000

といった解答を要求され、これに類似の練習に明け暮れることになる。ここに、誤解を生む大きな錯覚が生まれる。すなわち、この仕訳につき、借方側と貸方側とに等額をもって複記入 (double entry) がなされたと思いきや、こんでしまうのである。そこで、仕訳帳の金額欄の形式は、借方・貸方の2欄を区別した次のようなものが、理の当然として、昔も今も採用されているのだと速断してしまうので

ある。しかし、これは早とちりである。

仕 訳 帳

日付	摘 要	元 貢	借 方	貸 方
1/1	(現金)	1	5,000 00	
	(資本金)	2		5,000 00

ひるがえって、仕訳帳の機能をここで再考してみる必要がある。すくなくとも簿記技術上の側面から、仕訳帳の機能を考えれば、それは勘定分解の手段であり、元帳面の各勘定口座における勘定分類の予備的な手続にすぎない。従って、そこに要求される機能は、何勘定 (科目) が借方であるのか貸方であるのか

か、相手勘定（科目）が貸方であるのか借方であるのか、取引金額はいくらであるのか、が判明すればよい。そこで、当然の帰結として、摘要欄における勘定科目の左右の位置関係で借方・貸方が判明するような約束事を守っている限りは、この摘要欄における左右の位置関係を明確にして勘定科目を記入すること、金額欄に取引額を記入すれば事足りる筈である。金額欄にまで借方・貸方の2欄を対比して区別し2度記入する必要はない筈である。すなわち、次のとおりである。相手科目が1つの場合と2つある場合とを予想して示す。

仕 訳 帳

日付	摘 要	元 頁	金 額
1/1	(現金)	1	
	(資本金)	2	5,000.00
1/2	(諸口)	1	
	(商品) 1,500	3	3,500.00
	(家什) 2,000	4	

仕訳帳の金額欄につき、とくに借方欄と貸方欄を区別して、それぞれに等額を記入することが「複記入」であると考えているとすれば、完全な誤解であり、あるいは錯覚である。この種の誤解ないし錯覚が生まれているとすれば、その大半の原因は、前掲のような、（借方）現金 5,000 （貸方）資本金 5,000、

現金 5,000 // 資本金 5,000 あるいは、*per* 5,000 *a* 5,000 という形式の「仕訳の練習」にある。

現代の「伝票（会計伝票、仕訳伝票）」や、あるいは行列簿記において取引を行列における要素として把握するためのカードでは、前掲の取引の記帳は、どうなるのか。金額欄を貸借の2欄にすることは、およそナンセンスである。すなわち次のとおりである。

収 納 伝 票	
(資本金)	5,000

日付	列番号	現 金
	行番号	
備考	資 本 金	5,000

古典簿記書（英国と大陸）についてみるのに、古くから *Journal (Day Book)* の金額欄は貸借2欄式ではなく1欄式である。前掲と同類の例を *The path-way to knowledge. etc., by W. P., 1596* から引用して下に示す。

このことは、当座帳と仕訳帳とを合併した *Waste-Book and Journal* の場合でも同様で、*Journal* に相当する部分（次例では、左側）の

$\frac{1}{9}$	the Jornale or Daies Booke, marked with this Letter A		
	Anno Domini 1596		
	Money to be first written in 1. Cash is Debitor unto Stock 2000 pound and is for so much money remaining in Chest at this present.		
	God sending fortune to deale with it.	2000	0

Waste - Book and Journal

借方	現金	1	<i>l.</i>	<i>s.</i>	<i>d.</i>	1757年12月4日	<i>l.</i>	<i>s.</i>	<i>d.</i>
			30	0	0	J. ジャクソンから商品代金の残額を現金でうけとる。	30		
貸方	ジャクソン	2							

金額欄は1欄式である。ドン (Benjamin Donn) の簿記書 *The Accountant: etc.*, 1758 (2nd., ed., 1778) では、上掲のとおりである。

Waste-Book and Journal で Journal に相当する部分の金額欄を、あえて2欄式にしたらどうなるのか。その典型をディーガン (P. Deighan) の簿記書 *A Complete Treatise on Book-Keeping, etc.*, 1807 にみる。彼はこの様式の Waste-Book and Journal を「ダブリン式」と名づけた。次掲のとおりである。

Waste-Book and Journal

		<i>l.</i>	<i>s.</i>	<i>d.</i>		<i>l.</i>	<i>s.</i>	<i>d.</i>
借方	現金	10000	0	0	1805年1月1日	10000	0	0
貸方	資本金	10000	0	0	ダブリン			
					現金1万ポンドにて開業する。			

この2例の Waste-Book and Journal を比較していただきたい。一見してドンの方が合目的なことがわかる。ディーガンの場合のように金額を縦に重ねてみると、仕訳帳における金額欄を2欄式にすることがいかに馬鹿気ているかよくわかる。

仕訳帳の金額欄につき借方・貸方の2欄を区別する形式の発案者は、一般には、ジョー

ンズ (Edward T. Jones) だとされている。あの物議をかもした小冊子 *Jones's English System of Book-Keeping, etc.*, 1796 である。なるほど、ジョーンズは、伝統的なイタリア簿記の *Day Book* を説明するに当たって、中央から左右を区別した次掲のような仕訳帳を示した。

ンズ (Edward T. Jones) だとされている。あの物議をかもした小冊子 *Jones's English System of Book-Keeping, etc.*, 1796 である。なるほど、ジョーンズは、伝統的なイタリア簿記の *Day Book* を説明するに当たって、中央から左右を区別した次掲のような仕訳帳を示した。

借方諸勘定

ブリストル,

1794年1月

貸方諸勘定

1月	元		<i>l.</i>	<i>s.</i>	<i>d.</i>			元	<i>l.</i>	<i>s.</i>	<i>d.</i>
1日	頁	現金……借方	3,000	—	—	アブラハム・ボイド	出資金	頁	1,500	—	—
						チャールス・ワイズ	〃		1,500	—	—

このように仕訳帳の金額欄を貸借2欄に区別することが、「改良」であり「創意工夫」であると速断する向もあるが、それは断じて誤りである。ジョーンズのこの「改良」・「工夫」は、その後一向に普及しなかった。それも当然である。

勘定科目の貸借は、摘要欄の左右の位置により明白である以上、等額を2欄に区別した

金額欄に2度記入することは、明らかに無駄であり、しかも、わざわざ等額を2度記入しておいて、借方側・貸方側の各金額欄の縦の合計額が均衡するといってみたところで、まさしくナンセンスというほかはない。

要するに、double entry ということの意味をとりちがえて、twice in the Journal and twice in the Ledger と誤解（あるいは

錯覚)しているのである。

Ⅸ ジョーンズ簿記の原理と その批判者達

ジョーンズ (Edward T. Jones) の「英国式」(Jones's English System of Book-Keeping, etc., 1796) の特色を一般化していえば、「資本の当為在高すなわち帳簿在高と、実在高すなわち棚卸高との差額をもって利益(利潤)を測定する」という典型的な財産法の原理に立脚している点にある。例の混合商品勘定の残高と商品棚卸高との比較によって商品の販売益を測定する原理の拡大である。

故意か偶然かはわからないが、損益法を全面的に無視しているわけであるから、当然、名目諸勘定は悉く開設しない。ジョーンズの批判者達が異口同音にいうのは、この点に関してであり、前稿でもしばしば引用したとおりである。

ここでは、まず冒頭に、ジョーンズ批判の旗手と目されたミル (J. Mill) の An Examination of Jones' English System of Book-Keeping, etc., 1796 の有名な一節を引用しておこう。この部分は、例のフォスター (B. F. Foster) の簿記史 (The Origin and Progress of Book-Keeping: etc., 1852) にも引用されている。次のとおりである。

Of the amount of goods bought and sold during the year, Mr. Jones remains altogether ignorant until the time of stock-taking: and then he can only ascertain the quantity on hand. Hence there is no check against embezzlement; and, strange to tell, he has, in this little concern, fabricated purposely to show the excellence of his system, lost ten pieces of calico. Had the transactions been more numerous, he would probably have lost ten times as many.

ジョーンズの小冊子をめぐってまきおこった論議(むしろ論難といった方が当たっているが)、当時の事情を彷彿とさせるような記事が、フルトン (John Williamson Fulton) の簿記書 British-Indian Book-Keeping, etc., 1799 in Bengal, 1800 in London. にみられる。

すなわち、その第20項にいう。

「ジョーンズは、正常な複式簿記の手続きをさけて、わざわざ迂遠な方法を採用した。そこで、当然のこと乍ら、彼の書物を非難する目的で書かれたパンフレットの論難の標的となった」と。さらにいう。

「先頃, Gosnell, Collier および Marchant (匿名) のパンフレットを、ジョーンズの書物とともに入手した。Mill のパンフレットは、まだ入手していないが、Wicks のものはすでに入手しており、目下検討中である」と。

しかし、フルトンは、これらのパンフレットを逐一紹介しても結局は無駄骨折で、ジョーンズの場合は、「誤った原理」(false principles) にもとづいており、商品勘定の欠如にみられるように、すべては、複式簿記の理解そのものが不充分であることに由来すると断定している。

Gosnell, Collier, Wicks 等のパンフレットについては、前稿に紹介してあるので省略する。また、その他の人々の論難についても、すでに前稿に紹介してあるので、同様に、省略する。

Ⅹ 幻の書・『オールドカッスル簿記書』とその周辺

1543年(邦暦で天文12年)に、英国で最初の英語簿記書が、John (Johan) Gough (Goughe) という印刷業者によって、ロンドンで刊行されたと伝えられている。フル・タイトル末尾に b. l. impr. とあるところか

ら、黒体文字 (black letter) であると考えられる。ちなみに、この後のイムピンの簿記書 (Jan Ympyn Christoffels, *A notable and very excellent woork, etc.*, 1547. English version), ピールの2種の簿記書 (James Peele, *The maner and fourme etc.*, 1553, *The Patheway to perfectnes, etc.*, 1569.) およびメリスの簿記書 (John Mellis. *A Briefe Instruction and maner how to keepe bookes of Accompts etc.*, 1588.) は、すべて黒体文字である。

イムピンの簿記書 (英訳版) は、レーニン図書館に fragments の形で現存しているといわれている。もっとも、複写技術の発達のおかげで、日本でも容易に複写版の入手はできる。また、イムピン、ピールの第1の簿記書およびメリスの簿記書については、カツ (P. Kats) が、1926年3月27日、5月1日、1927年8月20日、27日および1930年1月11日、18日、25日の *The Accountant* 誌上に an abridged version in modern spelling 「現代英語綴りの抄録」を発表しているので、黒体文字の読みづらい向には大助りである。ピールの第1の簿記書 (1553年) は、カイル博士 (Dr. Karl Peter Kheil) によってプラーグで発見されたという。同氏の有名な古典簿記書のコレクションは、歿後の1913年に英蘭勅許会計士協会図書館に移されており、おそらくピールの簿記書も約1500冊にのぼったこのコレクションの一部として協会が入手したのであろう。現在、協会図書館に1部所蔵されている。破本が British Museum に1部所蔵されているという。メリスの簿記書 (1588年) は、British Museum, Huntington 図書館および英蘭勅許会計士協会図書館にそれぞれ1部ずつ所蔵されているという。幸いにも複写版なら日本でも入手できるから研究にはことかかない。

オールドカッスルの簿記書は、1779年の競売に1部が姿をみせたというが、今日では

『幻の書』で現存していない。もっとも、始めから存在しなかったのだとする説もある。それにしても、英国初期のこれらの簿記書のすさまじいばかりの消耗ぶりには驚かされる。最古の印刷された簿記書とされている『ズムマ』(1494) は、数十部ある筈で、日本にもオリジナルがある。数年前は東京の某ホテルでの売立てにも姿をみせたくらいである。『ズムマ』の場合は、数学史上でも著名な書物であり、その著者パチオリはイタリア・ルネッサンス黄金時代の代表的文化人であったから、「著名な数学書」として公的機関や王侯・貴族等の図書館に収納され後世に伝えられる機会が多かったのであろう。もっとも、拙見では、『ズムマ』の一部をなす《計算・記録詳論》(*Distinctio Nona, Tractatus XI.*) をパチオリ自身が執筆したとは思えないが、この問題についてはいずれ他日を期す。『ズムマ』とは異なり、前出の簿記書は、商人達が学習のためにテキストとして共用したり、写本をとるために手から手に渡ったりして、「使いつぶされてしまった」にちがいない。所詮、深く書庫に蔵して後世に伝えられるという書物ではなかったのである。簿記書としては、以て瞑すべき命運といわねばなるまい。

1543年という年とオールドカッスル (Hugh Oldcastle) という名前が出てくるのは、メリスの簿記書 (1588年) の「読者へ」(to the Reader) の記事である。その一節にいう。

「私は、この簿記書が私自身の労作であると自称するほど厚顔ではない。まごうかたなく私は、1543年8月14日にロンドンで印刷された往時の古いコピーの書替え人であり覆刻人 (renewer, reviver) であるにすぎない。その簿記書は、教師であったオールドカッスルという人によって編成、発表、作成、刊行された (an auncient old copie printed here in London the 14th of August 1543, then collected, published, made and set forth

by one Hugh Oldcastle etc.)」。

R. R. Coomber, *Pioneers in English Book-Keeping Texts*-Hugh Oldcastle and John Mellis (*Accounting Research*, Vol. 7. No. 2. 1956) や Cosmo Gordon, *The First English Books on Book-keeping* (*Accounting Research*, Vol. 5. No. 3. 1954) の見解を総合して検討してみると、こうなる。1779年に1冊だけ現存していた1543年刊行のさる簿記書があった。この年の競売に出されたとき、S. Paterson なる人物(セールス・カタログの製作者)が種々調査して前出のタイトルをカタログにのせた。しかし、この場合にも、著者名はない。

ということになると、1779年の売立てでは英国で最初の英語簿記書が *Here ensueth etc.* という書名で姿をあらわしたが、著者名はない。他方、メリスの簿記書では、1543年8月14日に Hugh Oldcastle によって簿記書が刊行されたとはあるが、その簿記書名はない。そこで、厳密には、1543年にロンドンで1種の簿記書しか刊行されていなという前提なしには、前出の簿記書名と著者名とが無条件には結びつかないことになる。

John B. Geijsbeek, *Ancient Double = Entry Bookkeeping: etc.*, 1914 (p. 13) などは、A profitable Tretyce (Treatyce) の存在そのものに疑問をいだいていた1人であるし、また、先出のカッツ (P. Kats) など、1543年に刊行された A profitable Tretyce 以外の小冊子が今のところ発見されていないので、通説ではオールドカッスルの A profitable Tretyce ということになっているが、反論する物証もないので、この通説に従っておく旨をのべている。甚だどうも奥歯にもののはさまったようないい方である。

ともかくも、通説では、1543年8月14日にオールドカッスルによる前出の簿記書が公刊されたことになっている。この年のこの月すなわち天文12年8月には、種子島に鉄砲が伝

来している。

オールドカッスルの簿記書の中味は、そのリバイバルだというこのメリスの簿記書で検討する以外にはない。

文献史的な研究として、肝心かなめなところは、拙見では、次の2点である。

その1. パチオリ (Fra Luca Pacioli, Lucas de Burgo sancti Sepolchri, Luca de Borgo San Sepolcro) の簿記書『ズムマ』・《計算・記録詳論》1494年) とオールドカッスルの簿記書 (1543年) との関係。

その2. オールドカッスルの簿記書 (1543年) とメリスの簿記書 (1588年) との中間の時期に、イムピンの簿記書 (英訳版, 1547年)、ビールの2種の簿記書 (*The maner and fourme etc.*, 1553年, *The Pathwaye to perfectnes, etc.*, 1569年) が刊行されているという事実。そこで、これら英国初期の簿記書の相互の関連性。

本稿の論旨からいささか脱線気味ではあるがパチオリ『ズムマ』・《計算・記録詳論》について、あらかじめ若干のべておく。1494年にベニスで刊行されたこの書物が、「最古の印刷された複式簿記書」であることは疑いがないけれども、パチオリをもって「簿記の始祖」であるかの如き取扱いは、もうこの辺でやめにしたらどうか。その理由は、第1に、『ズムマ』のうちの *Distinctio Nona Tractatus XI* (第9編. 論説第11項) のこのいわゆる「ベニス式簿記」の部分、パチオリ自身が執筆したかどうか疑わしい。この点については、著名な会計史家 Fabio Besta, *La Ragioneria* やこの説を引用したペラガロ (Edward Peragallo, *Origin and Evolution of Double Entry Bookkeeping*, 1938. p. 56) に明らかである。パチオリは学僧であり、数学者であり大学教授であって、弱年の頃ベニスの大商家の子弟の家庭教師をした経験があるとはいっても、当時からかぞえて24年の後にベニ

スで『ズムマ』を出版しているわけであるから、よしんば24年前にベニスの簿記を修得する機会があったとしても（当時、彼は数学を学んでいたといわれる）、この永い時間のへだたりをどう考えたらいいか。第2に、「ベニス式」（*il costume di Venetia*）の簿記などというが、一説によると、15世紀末の当時としては、ベニスが出版業の中心地であったといわれており、パチオリは、数学書の『ズムマ』を出版する目的でベニスにきた公算が大きい。第3に、今後のイタリア語専門家の検討にまちたいが、『ズムマ』のうちの《計算・記録詳論》の部分の文章や単語の使い方に、ローカル色が濃く全体と平仄の合わない疑いがある。もしそうだとすれば、この部分をパチオリが他からそっくり借用（つまり剽窃ということになるが、当時としては、こういう見方それ自体がなかったのであろう）してきた可能性が大きい。前出のカッツなどは、パチオリが『ズムマ』の中に *incorporating*（編入した）というデリケートな表現を用いている。第4に、パチオリやパチオリ派（*Paciolian*）といわれた連中の簿記の特色は（いわゆる「ベニス式」の特色といってもよい）、「主要な部分を二つに分け、その一を財産目録、その二を記帳整理（*disposition, disporre*）」とし、後者について、日記帳（当座帳）、仕訳帳、元帳の三主要簿制（*tre libri principali*）を採用する。仕訳（日記）帳制としては、いわゆる単一仕訳帳制である。これが後世にイタリア簿記ないしベニス式簿記の伝承として永く引きつがれていくわけである。そこで、後になると、この帳制を“old fashioned trio”と揶揄する向もでてくる。『ズムマ』のいわゆる「ベニス式」は、当時の簿記実務に立ちおくらせていたとする説がある。たしかに、たとえば、1596年にロンドンで刊行のニコラウス・ベトリの簿記書（英訳版、by W. P.）では、おそらく当時のオランダの実務を反映したとみられる分割仕訳帳制ないし複合仕訳帳制への萌芽がすで

にみられる。さらに、ハミルトン（Robert Hamilton, 1777年）やフルトン（J. W. Fulton, 1799年・1800年）の注目すべき論評がある。その要旨は、もともとローカルなこの3主要簿制（*tre libri principali*）が、あたかも簿記の普遍的な構成原理（*constituent principles*）の一部であるかのように誤解されているという。注目すべき意見である。

1588年8月に刊行されたオールドカッスルのリバイバルであるというメリスの簿記書（以下、便宜上、オールドカッスル・メリスの簿記書という）の問題点やパチオリの『ズムマ』・《計算・記録詳論》とのかかわり合いについて検討してみよう。

一般には、オールドカッスル・メリス簿記書はパチオリの英訳であるという。たしかに、両者の各章の区切り方やそのタイトルを英語になおして比べてみると、一目して極めて酷似している。拙著の宣伝のようでいささか気がひけるが詳細は『英米（加）古典簿記書の発展史的研究』（学習院学術研究叢書、第一法規出版株式会社刊）を参照されたい。もっともこの書物は非売品で店頭には出ないが、大学図書館には院から寄贈の手筈になっている。

以上の件に関して、とくに注目すべき点が2つある。第1は、前出のカッツがいみじくも指摘しているように、「教師」（メリスの記述によると、「市場小路の聖オラプス教区で、算用を簿記を教えていた」という）であるオールドカッスルにベニスの地域語が多くまじっているといわれる《計算・記録詳論》のイタリア語を英訳する能力があったであろうか。ロンドンには当時イタリア商館が多くあったという。この商館の番頭ならばいざしらず、また、イムピンのように大商人でイタリア滞在が長年間に及んだような場合（カイル博士によるとベニス滞在は12年に及んだという）ならば、あるいは、このような場合でこそ、はじめて英訳なりオランダ語訳なりが可能になるのでは

あるまいか。さらに、前出のオールドカッスルの簿記書のフル・タイトルの末尾をみていただきたい。すなわちこうある。called in latyn *Dare et Habere*, and in Englishe *Debitor and Creditor* 「ラテン語で *Dare et Habere*」・「英語で借方(主), 貸方(主)」と。イタリア語からの英訳なら、当然, called in Italian *Dare e(ed) Avere* となる筈ではなかろうか。仮説としては、いささか突飛ではあるが、一部の人々のいう次のような可能性もあろう。すなわち、パチオリ(あるいは、パチオリが借用した簿記書)とオールドカッスルとには、共通のラテン語のオリジナルがある。前者はそのイタリア語訳であり、後者はその英訳であると。第2は、よしんばパチオリの英訳であったにしても、両者を比べてみると、当時の英国の国情に鑑みて、自主的に取捨していることがわかる。たとえば、官庁やメセタリア(取引所)との会計、銀行勘定や為替手形等の章は、オールドカッスル・メリスの簿記書では、悉く削除してある。早い話が当時の英国には銀行はまだないも同然であった。

紙幅の制約もあることゆえ、先に指摘した第2の点、すなわち、英国初期(16世紀)の5種の簿記書の相互の関連性に注目しながら、オールドカッスル・メリス簿記書を検討してみよう。

大学教授であり大の字がつく数学者であったパチオリ、そして「算用と簿記」の教師であったと伝えられているオールドカッスル、この2人と、イムピンとピールの2人とは、まことに対照的なところがある。すなわち、前者は教師であり、後者は商人であり実務家なのである。イムピンは大の字がつく絹商人であり、ピールは塩商人でありまた1562年から1585年頃までクライスト病院の書記として帳簿をつけていたという。その帳簿の一部は現存している筈である。このような、教師と商人、教師と実務家、一般化して言えば、「理論派あるいは悪くすると教条主義派」と

「経験派あるいは悪くすると無原則派」という2派の対立は、とくに英国古典簿記書について16世紀から19世紀に至る間を通覧すると、実に繰返し出現している。就中、その典型的なケースは、産業革命期の前期と後期を代表する次の2人であろう。そのひとり、筆者がスコットランド講壇派と名づけた一派の頂点に立つエディンバラのA.M. メヤー(John Mair, *Book-keeping Methodiz'd: etc.*, 1736年)であり、他は、ロンドンの商人ブース(Benjamin Booth, *A Complete System of Book-keeping, etc.*, 1789年)である。さらに、対立する2派を止揚する弁証法的展開の担い手が常に出現するというのも極めて興味深いところである。この場合でいえば、1756年生まれの名著数学者で天文学者、ロンドンのFinsbury Square Academyの教授、Trinity Houseの試験官、ケリー博士(Dr. Patrick Kelly, *The Elements of Book-Keeping, etc.*, 1801)である。詳細は、前出の拙著の第1部『論説』・第1章総論; 近代簿記への道・第2節と第3節、および第2部『英国古典簿記書解題』を参照されたい。

オールドカッスルのリバイバルといわれるメリスの場合でいうと、彼自身は、その簿記書のフル・タイトルの末尾に *Scholemaister* とあるように教師である。カイル博士(Dr. Karl Peter Kheil, *Über einige ältere Bearbeitungen des Buchhaltung*, 1896. p. 65; A. H. Woolf, *A Short History of Accountants and Accountancy*, 1912. p. 131)によると、メリスは、ケンブリッジのトリニティー・カレッジで Dr. Robert Forth の助手をつとめ、後に public school の数学教師となり、1564年からはロンドンの Southwark で private school を経営したという。この経歴からいえばいわゆる教師派であって商人(実務)派ではない。しかし、オールドカッスル(1543年)とメリス(1588年)の間に、商人イムピンの簿記書(英訳版, 1547年)、実務家ピール

の2種の簿記書（1553年、1569年）があったこと、この事実を注目すべきである。これがメリスの簿記書に一味違った趣を与えることになるのである。この問題を、パチオリの場合ともひきくらべながら検討してみよう。

パチオリの『ズムマ』・『計算・記録詳論』は、前出のように、「財産目録」と「記帳整理」の二部分からなり、後者について、日記帳（当座帳）、仕訳帳、元帳の3主要簿制を採用しており、記述の序次も整然とこのようになっている。学習のテキストとしては、うまくできている（ある意味ではできすぎている）と思うが、さて実務の啓蒙書・指南書としてみた場合、甚だ心もとないところがある。「当時、学校の教材として流布していた手写本の *reworked version* である」といった推論の生まれるゆえんでもある。最大の欠陥は、元帳の総括手続（*balancing, general balance*）についてほとんどふれるところがない。残高勘定の説明が完全に欠落しているし、名目諸勘定の損益勘定口座への振替記帳については、いっさい仕訳帳を経由しないで直接異口座間の振替を行なう旨を説明し、わざわざ、「仕訳帳を経由しない理由」までのべたてている。その理由というのは、要するにいわゆる「取引」ではないからという。つまり、肝心かなめなところで尻抜けになっているのである。商人や実務家の書いた簿記書では、こうはならない。その典型的な例が、イムピンの簿記書である。彼の場合では、カツが収録した1543年仏訳書の *Exempliare* をみると、仕訳帳の末尾に、名目諸勘定についての *Closing Entry* と、損益勘定の差額を資本主勘定へ振替える *The Final Entry* がみられる。残高勘定の解説もある。絹商人イムピンの面目躍如たるものがある。細かいことをいえば、パチオリの場合、15世紀の商人簿記にすでに存在していたといわれる *libri segreti*（秘密元帳）にふれていないこと

を指摘する学者もある。ピールの簿記書は、明らかにイムピンの簿記書の影響をうけており、また、このほか、マンゾーニ（*Domenico Manzoni, Quaderno doppio, 1540*）との類似性を指摘する学者もいる（例えば、P. Kats）。ともかくも、パチオリ風のものとは一味も二味も違う。マンゾーニの場合は、仕訳帳を経由して損益勘定口座に振替えている。メリスの簿記書は、明らかに、イムピン、ピールの簿記書の影響をうけているものと考えられる。カツなどは細かい分析をしているが、ここでは紙幅の制約もあるので、一見して明らかな事実を指摘しておくに止めよう。メリスの簿記書は、本文の末尾に *Finis*（完）と記し、ついで、次のような記述がみえている。

Here endeth my Author, and for the better and plainer understanding and practise of these rules, I have hereunto added a little Inventorie, Journal, and Leager, as followeth : with a briefe Treatise of *Arithmetick* all together. &c.

財産目録、仕訳帳（仕訳日記帳）および元帳の雛形を用いた具体的な解説が加筆されており、一段とわかり易いものになっている。かくして、平文による「一般教則」（*instruction*）の説明と、帳簿雛形（場合によっては、複数の帳簿雛形、例えば *Set I ~ Set III* といった）による具体的記帳手続の解説、という類型が爾後の多くの簿記書に定着していくのである。わが国初期の簿記書（この場合、訳本は除く）のうちの最も優れた事例でいえば、『銀行簿記例題』（大蔵省銀行課編纂、版權免許明治12年4月10日）と『銀行簿記例題解式・附半季決算法』（大蔵省銀行局編纂、版權免許明治14年8月1日）とがその一典型である。

XI 英米古典簿記書解題（追加）

ブラウンの小冊子

1616年（邦暦で元和2年、この年の4月家康歿す）に、I. B. *Merchant* の次掲の小冊子がロンドンで刊行された。著者は J. B. (John Brown, Browne) であるという。

The Merchants Avizo, Very Necessary for their Sonnes and Servants, when they first send them beyond the Sea, as to *Spaine and Portingale, or other Countries, Made by their hearty welwiller in Christ, I. B. Merchant, etc.* Landon, Printed by John Bill, 1616.

Historical Accounting Literature の『書目』では、Book-keeping and Accounting の部門の69頁の *England and Wales* の分類に、インピン、ピール、メリス、につぐ4番目の簿記書として、また、70頁には、1607年版と1616年版とが、次掲のように示されている。

Browne, John

The Marchants avizo. 1589. Edited by Patrick McGrath.

Cambridge, Mass.: Baker Library, Harvard Graduate School of Business Administration, 1957. XXXVi, [2], 64p. 27cm.

B[rown], J[ohn]

The merchant avizo. Verie necessarie for their sons and servants, when they first send them beyond the seas, as to Spaine and Portingale, or other countries. London: John Norton, 1607. 39 leaves.

B [rown], J [ohn]……1616年版（省略）

1589年は邦暦で天正17年であり、この前年にメリスの簿記書が刊行されており、また、イスパニアの無敵艦隊がこの年に全滅している。1607年は邦暦で慶長12年で、家康の江戸開府の後5年である。

Avizo とは、おそらく Aviso (əvaizou) のことで、研究社の新英和大辞典によれば、

1. 公文書送達 (dispatch); 通報 (advice).
2. 公文書送達船 (dispatch boat)

[Sp., = advice]

とある。

この小冊子の内容は、タイトルからも推量しうるように、商人とその息子達あるいは使用人達との間の交易上の連絡通信の手引書であって、簿記書ではない。*Historical Accounting Literature* の『書目』の Book-keeping and Accounting の部門に、この小冊子が収録されている理由、World Microfilm Publications がこの小冊子を簿記書として販布した理由、はよくわからない。

参考のために、28・29頁の記事（タイトル）を紹介しておく。文中の日付1589年1月16日 (the sixteenth day of Ianuarie, 1589) に注目されたい。ここからも、この小冊子の初版は、1616年ではなく、1589年（頃）であることが推定できよう。

Heere Followeth

the forme of a Spanish account, and how to make a bill of lading, a letter of Remembrance, a bill of exchange, a bill of debt, an acquittance, a letter of Atturney, and obligation, and a Policie for assurance, & C.

Set this following as the Superscription upon the Account.

The account of
my Master, Alderman

Aldworth, Merchant of the Cittie of Bristowe, giuen by mee his seruant R.A. the sixteenth day of Ianuarie, 1589.

ダフォンの第2の簿記書

1670年（邦暦で寛文10年，家綱の治世）に，ロンドンでダフォン（Richard Dafforne）の第2の簿記書の第3版（the third edition）が，彼の息子，John Dafforne によって刊行された。そのタイトルは，次掲のとおりであった。なお，この初版は，*Historical Accounting Literature* の『書目』によると，1640年（邦暦で寛永17年，家光の治世）であり，出版人は *The Merchants Mirrour : etc.* 1635. と同様に，Nicolas Bourne であった。

The Apprentices Time-Entertainer accomptantly : or A Methodical means to obtain the Exquisite Art of Accomptantship : Digested into THREE PARTS, as is exemplified upon the next Leaf. By RICHARD DAFFORNE Author of the *Merchants Mirrour*. Very requisite to be Exercised by all such as proress the Teaching of the said Art. Now Reviewed, and in several places Rectified, the *Waste-Books* altered, and composed after the usual Method of Merchants : Augmented with 85 Instances ; and at the end of each Book is added a *Trial Balance* : Likewise how to draw out *Accompts of sales, Accompt Current*, and Invoices for him we serve in Commission. Also, The form of a Book for Charges of Merchandize, which is at the end of the first *Waste-book* ; by the use of which all the particular Charges paid in the *Cash-book* are at the months end collected into one Sum and so carried into the *Journal*. By JOHN DAFFORNE Accomptant, and Teacher of the said famous and never-dying Art of Accomptantship, in English or Dutch : etc., THE THIRD EDITION. London, 1670.

巻頭の John Dafforne の序文 *To my loving Friends*, The School-Masters, that are

Lovers and Teachers of this Famous and never-dying Art of Accomptant-ship. の冒頭に，次の文章がみられる。

Gentlemen, My Father in his 10 *Rules of Aid* saith, that whosoever promiseth, the Promiser is *Debitor*. I promised to present you a Treatise upon *Accomptant-ship* whose order I have not seen extant, etc.

Rules of Aid とあるのは，いうまでもなく，Richard Dafforne の *Merchants Mirrour*（本論の第2部を参照）のもので，正確には15対³¹（30）である。それはともかくとして，ダフォンのこの *Rules* が当時有名であったことは，この文章からも充分うかがえる。

前掲のタイトルの一部に *Digested into THREE PARTS*, とあるように，この簿記書は3部構成になっており，その各々の明細は，タイトル・ページに次いで示されている一覧表で図解・明示されている。

第1部は，3主要勘定 *Three Prime Accompts* (*Proper, Factorage, Company*) に関する340項の質疑 (*Q and A*)，第2部は60の *Rules of Aid*（30対の仕訳の証例），第3部は *The Young Accomptants Compasse* となっており，最後の部分は，巻末に次掲のようなタイトル・ページを別に開設している。

The Young Accomptants Compasse ; or Brief Directions, How The unexperienced Accomptant (that be-takes himself into the service of the Honourable Company of *Merchants of London*, trading into the *East-Indies*, (or elsewhere) is to begin, prosecute and completely finish his Office. Entrèd by way of Question and Answer, in form of *Debitor* and *Creditor*. Compiled by Richard Dafforne, Practitioner and Teacher of the same in *English or Dutch*, London, Printed by William Godbid, for Robert Horn, A. D. 1669.

解題の手順が前後するが、ここでは、まず、第2部の *the 60 Rules of Aid* から検討しておこう。前著の *The Merchants Mirrour : etc.*, 1635. の場合の貸借15対^{ツイ}(30)の *Rules of aide, etc.* が貸借30対^{ツイ}(60)に変わっているのは何故か。それは、*The Merchants Mirrour : etc.*, の場合では第2部で紹介してあるように、一般化した仕訳のルールとしての性格が顕著であり、その反面では、抽象的でくに初学者には、わかり難い面をもっているがこの *The Apprentices etc.* (文字どおり初心者向の) の場合は、一般化・抽象化したルールではなくて、開始記帳から総括記帳に至る典型的な取引事例の貸借仕訳そのものを具体的に示した *the 60 Rules of Aid* である。従

って、正確な意味での「ルール」(rules)ないし「教則」(precepts)というべきものではなく、むしろ typical instances (証例)ないし examples (難形、例題)というべきものである。その一部を紹介しておこう。

開始仕訳を、資本 (Stock) 勘定を相手科目として行なっていることが注目される。ごく初期の英国簿記書の場合では、明らかに大陸簿記の影響で、残高勘定 (開始残高勘定, *bilancio d'apertura*) を用いたが、ダフオーンの場合では、すでに、この方式は採用していない。

第1部は、*Question 1. Book-keeping by way of Debitor and Creditor is renowned to be an exquisite knowledge ; shew me Book-keeping Event ?* からはじまる Q and A

Now follow the 60 Rules of Aid, depending upon the Premises.

The Debtors in the Rules of Aid.

1. The money that we have at the taking of our Inventory is entred by the name of Cash _____ Debitor.
2. The Commodities that are remaining unsold in the Ware-honse _____ Debitor.
2. The Commodities formerly Shipt unto another Land, or Town, to be sold for Proper or Company account, whereof all, or part of them are yet unsold.
Voyage to Roan, consigned to Jean du Boys _____ Debitor.
2. The Honses, Lands, Rents, Legacies, Ships-parts; each name severally _____ Debitor.
3. People of whom we ought to have; each name severally _____ Debitor.
4. Stock _____ Debitor.

The Creditors in the Rules of Aid.

1. Stock _____ Creditor.
2. Stock _____ Creditor.
2. Stock _____ Creditor.
2. Stock _____ Creditor.
3. Stock _____ Creditor.
4. People unto whom we owe; each name severally _____ Creditor.

(中略)

30. When at the Ballancing of our Books we find money resting in the House;
 OR,
 Wares remaining unsold
 In our { Own hands,
 Eactors hands;
 OR THAT
 Partners, Eactors, & others,
 have not given us full content
 Such *unsold Wares* in our
 own hands.
 OR,
 Voyage for the *unsold*
Commodities, in the hands
 of our Factors.
People and *Cash* are in the
 OLD, and will be in the
 New Books ————— Debitor.

30. When at the Ballancing of our Books we find People, as
 { Factors,
 Partners, or others,
 to whom we have not given
 full content;
 Such *People* and *Stock* (if
 our Estate stands well) are
 in the OLD, and will be in
 the NEW Books ————— Creditor.

で、基本的には、イタリア式(ベニス式)に忠実な、財産目録(inventory)と記帳整理(disposition)の2部構成の伝統を踏襲しているが、質疑の内容は、極めて具体的であるのがとくに目立つ。

Quest. 3 Is it needful that a man make an *Inventory* when he beginneth these accompts ?

Ans. Master James Peele answereth,
 Yea surely ; except they begin without an thing, and so proceed upon Credit only ; or else with a *Stock* only in Ready-money : otherwise (saith he) if they any *Remainners*, as *Ready-money*, *Debts*, *Goods* and *Creditors*, they must make an *Inventory*.

開業財産目録の解説がたくみに行なわれている。また、とくに、James Peele (前出)の名がみえているのが興味深い。この外にも、折にふれて Master James Peele の名前が登場する。(by Master James Peele, etc. 例えば Ans. 5, 9),

また、この質疑を通じて、*Merchants Mirrour* (前出)が実にしばしば引用されている。in my *Merchants Mirrour*, in the *Merchants Mirrour*, of my *Merchants Mirrour* として。

なお、次頁のような合計試算表(雛形)を例

示しているので、参考のためにとくに紹介しておこう。

ディルワースの簿記書

1803年(邦暦で享和3年)に、ディルワース(Thomas Dilworth)の簿記書がニューヨークで刊行された。タイトル・ページの記事の一部に、Improved and Corrected Form The Last London Edition とある。このロンドン版は入手していないので不明であるが、*Historical Accounting Literature* の『書目』の83頁には、次掲の簿記書がみえている。

Dilworth, Thomas

The young book-keeper's assistant : shewing him, in the most plain and easy manner, the Italian way of stating debtor and creditor ; etc. Seventh edition. London : Printed by Richard and Hentry Causton, 1777.

なお、エルドリッジの『書目』(p.49)では、Other editions として、1781, 1784, 1793, 1796, 1801, 1828, 1839, 1856, 1870の記事がある。そこで、The Last London Edition とあるのは、1801年版という事になる。相当のロング・セラーだったようである。ニューヨーク版によってタイトルを示すと、次頁(左側下)のとおりである。

借 方	試 算 表			貸 方		
現金	5861	10	5		4612	5 3
資本金	674	19	1		6985	— 3
ラッヤ—570. ピーシズ	3776	11	10	415. ピーシズ	3452	5 —
家屋, ランパート街, 白馬	2340	—	—		60	— —
船舶, ロンドン, スピードウェル	450	—	—		45	7 6
<i>Bartel Bartelson</i>	1628	—	—		900	— —
<i>David Darling</i>	1163	16	—		1532	16 —
洋紅—748. ポンド	1570	16	—	748. ポンド	1927	6 —
エクセター陶器—340. ピンズ	1367	—	—	225. ピーシズ	976	15 —
利息	13	—	—		62	3 4
<i>Evert Evertson</i>	637	19	8	80. ピーシズ	611	8 —
<i>Durances</i> —160. ピーシズ	360	—	—		200	— —
<i>John Dafforne</i>	25	—	—		100	— —
保険料	—	—	—		32	— —
損 益	153	12	—		91	13 6
カージ織—180. ピーシズ	591	—	—		60	3 3
アムステルダム向船積	1510	12	8		1140	4 —
ハンブルグ向船積	387	15	11		378	18 11
ダンッチヒ向船積	286	—	—		81	23 4
<i>John Jacobson</i> —14232ギルダー	1423	4	—	10560. ギルダ	1016	19 10
<i>John van Essen</i> —3600マルク	378	18	11	3600. マルク	372	— —
<i>Peter Brasseur</i> —2960フローリン	381	2	4	2960. フローリン	374	13 8
黄銅線—150輪	262	13	—		—	— —
	<i>L.</i> 25313	3	10		<i>L.</i> 25313	3 10

Dilworth's Book-Keepers Assistant Improved : showing him, in the most plain and easy manner, the Italian way of stating Debtor And Creditor, etc. A Synopsis or Compendium of the Whole Art of stating Debtor And Creditor, etc. The Whole designed for the use of schools, etc. Improved and Corrected from The Last London Edition. published and sold By T. B. Jansen & Co. 1803. New - York

どういふわけか、このタイトルでは young がぬけているが、そのあたりの事情は不明である。

編, 章, 節の区切りはなく, タイトル・ページが2頁(分), Preface. が6頁, 次いで帳簿

雛形が9頁からはじまって146頁まであり, 巻末に「大意」(Synopsis)として14頁をあてている。この部分については、とくに、次掲のタイトルを設けている。

A Synopsis, or Compendium of Merchants' Accompts : containing particular rules for the true stating of Debtor And Creditor, in all the cases that can happen in the whole course of a Merchants' Dealing, etc.

Preface (序論) は、僅かに6頁であるが、極小の活字組みで、この簿記書の特色ないし方針を端的にのべている。とくに注目される諸点を列举してみよう。

(1) 帳制としては、古典的ないわゆるベニ

式の3主要簿制 (*tre libri principali*), 当座帳, 仕訳帳, 元帳を採用している。

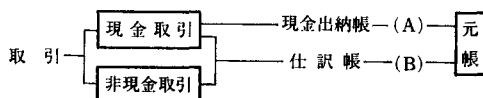
(v) 旧元帳の締切りと新元帳の開始記帳に関し, とくに 'is not here taught by precept, but example.' とことわっている。Example is better than precept 「証例は訓戒にまさる」[諺] という主旨であろう。

(vi) 仕訳帳に関連して, 「一部の簿記係は, 現金の出納に関する取引の仕訳について, (仕訳帳から) 除外しているが, この簿記書では, これらの現金取引を現金出納帳と仕訳帳の双方に記入する方式を採用した」とのべている。つまり, 現金出納仕訳帳と普通仕訳帳とよりなる分割仕訳帳制を採用しないと, わざわざことわっているのである。そして, この主意について, 'so to do for learner's sake' (学習者にとっては, この方がベターである) と考えている。良い意味でも悪い意味でも, いかにもテキスト(初心者向)としての立場に徹したところがある。ロング・セラーとなった理由でもあろう。いうまでもなく, 実務からの乖離は否定し得べくもない。

Preface (p. 3) から, この部分を引用すると, こうである。

The several Journal entries relating to the receiving and paying of money, though omitted by some book-keepers, are yet used by others, and therefore I have placed them in the Journal as well as in the Cash-Book, judging it most convenient so to do for the learner's sake, that he may understand them the better.

この簿記書の帳制並びに記帳の手順を図示すると, こうなる。



(A)……現金勘定につき, 月次に合計額を一

括して現金勘定口座に転記。

(B)……現金勘定の相手科目につきそれぞれの勘定口座に個別転記。

非現金取引について, すべてそれぞれの勘定口座に個別転記。

また, 例の3主要簿制に関連して, Prefaceの注記, Note (p. 5) には, 次のような注目すべき記事がある。

To an experienced book-keeper, a Journal without a Waste-Book, or Waste-Book without Journal is sufficient.

つまり, 内容的には当座帳と仕訳帳とを合併した仕訳日記帳制の採用である。

以上のほか, とくに注目すべき点を示す。

(1) 開始記帳は, 資本(主)勘定を相手として資産, 負債の諸勘定を仕訳し, 元帳に転記している。

(2) 残高・損益の両集合勘定への記帳は, すべて直接口座間の振替によっている。とくに balance (or profit and loss) sheet による検証はしていない。

(3) 帳簿雛形は, A, Bの2例により, 当座帳, 仕訳帳, 現金出納帳, 元帳の明細を示している。また, B雛形では, とくに家事費明細帳の雛形を掲げている。

巻末の Synopsis, or Compendium of Merchants' Accompts : etc. (pp. 1~14) は, 詳細な取引事例を設定した仕訳の解説であり, その末尾は, The General Balance of the whole Ledger, in order to transfer the same into New-Books. となっている。

本書の全体の構成や解説方法について, とくに Mr. Webster の影響をうけているとのべている (p. 3)。このウェブスターとあるのは, おそらく, William Webster の次掲の簿記書であろうと思われるが, これらの簿記書はまだ入手していない。

Webster, William

An essay on book-keeping, according to the true Italian method of debtor and creditor, by double entry. *etc.* London, 1715.

Essays on book-keeping. Wherein the art is fully explained, and reduced to practice, by a variety of pertinent examples, in all its different branches. *etc.* Glasgow : 1758.

(この書名は、*Historical Accounting Literature* の『書目』によった)

マルシュの初期の簿記書

1832年(邦暦で天保3年、家齊の治世)に、マルシュ(C. C. Marsh, 1806—1884)の次掲の簿記書が、ボルチモアで刊行された。タイトルの一部に、By C.C. Marsh, Accountant, Author of “Double Entry Book-Keeping, simplified” とあるところから、1877年に増補版が刊行された *The Science of Double Entry Book-Keeping, simplified etc.* (前出) のオリジナルは、相当早い時期に刊行されていることがわかる。

The ART of Single-Entry Book-Keeping ; improved by the introduction of *Proof-or Trial = Balance, &c.* By C.C. Marsh, Accountant, Author of “Double Entry Book-Keeping, Simplified.” Baltimore : 1832

小型本で118頁の小冊子である。日記帳(Day Book)、元帳(Leger)、現金出納帳(Cash Book)および仕入帳、売上帳、手形記入帳等の諸帳簿を用いている。

日記帳と元帳とでは、債権・債務にかかる人名諸勘定の増減の記帳(単式)だけを行なっている。単式とよぶゆえんである。

内容的について、とくにみるべきものはない。

メサーベいの簿記書

1875年(邦暦で明治5年)に、メサーベイ(A. B. Meservey, 1831—1901)の簿記書がボストンで刊行された。そのタイトルは、次掲のとおりであった。

Meservey's Book-Keeping, single and double entry. Boston : 1875, 1877, 1882.

全編が2部に分かれており、Part I, Single Entry(単式)、Part II, Double Entry(複式)からなる。以下、後者について検討する。

「教則」と「証例」とからなる伝統的な形式のテキストで、前者は、(1)から(91)におよぶ Q and A(問答)様式を採用している。

「証例」(Example)は、IからXIIIまであり、とくに、Rules for closing Ledgerを独立した項目として解説している。

Example I は、イタリア式の3主要簿制(日記帳、仕訳帳、元帳 *tre libri principali*)であり、仕訳帳の金額欄は、今日のテキスト風の貸借2欄式であり、元帳は標準式である。損益および残高の両集合勘定は開設してあるが、これらの口座への振替には、仕訳帳を経由せず、直接口座間の振替を「赤記入」(with red ink)で行なっている。

Example VIでは、仕訳日記帳制(Journal Day-Book)を採用している。

Example XIでは、Journal Day-Bookを総合仕訳帳化した複合(分割)仕訳帳制を採用し、また、多桁式(現金欄、支払手形勘定欄、諸口欄)の仕入帳、多桁式(現金欄、受取手形勘定欄、諸口欄)の売上帳および現金出納帳を分割(特殊)仕訳帳としている。

同書131~132頁の Rules for closing Ledger から、とくに注目すべき点をあげる。

- (1) 損益・残高の両集合勘定につき、ひとしく closing という概念をあてはめている。これは正しくない。「締切」とは専

ら名目勘定にあてはまるからである。

- (2) この両集合勘定への直接口座間振替に関する「赤記入」・「黒記入」につき、次のようにいう。

All entries when *first made*, in closing a Ledger, should be written with *red ink*; when they are *transferred* with *black ink*.

Ⅹ 補 項

- (1) **Double Entry**（複式）という用語について

複式 Double Entry という用語は、もともと単式 Single Entry の対語として（それと併行して）用いられたものと考えられるから、その採用は、時期的にみて割合に新しい。今日われわれがいう「複式簿記」に当る往時の表現は、the order of debtor and creditor, *Italian manner* (method), way of debtor and creditor, form(e) of merchants, method used by merchants 等である。Double Entry といった表現は、おそらく18世紀に入ってからのはじまったものと考えられる。例えば、1739年に London で刊行された Richard Hayes の簿記書 *Modern Book-keeping; etc.* のタイトルの末尾には、*Merchants Accounts by Double Entry.* とある。これなどは、各種の『書目』で調べた限りでは、古い用例だと思う。前世紀に入ると、かなり定着したものとなり、例えばフォスター (B. F. Foster) の簿記書の *Double Entry Elucidated. etc., M. DCCC. XIII. (1843)* がみられる。『帳合之法』で福沢は「本式」と訳しており、『商家必用』で加藤は「複認」（カサネドメ）と訳している。ちなみに単式 Single Entry につき、前者では「略式」と訳し、後者では「単認」（ヒトエドメ）と訳している。

- (2) ケリー博士のメヤー論評

著名な数学者であり優れた簿記書の著者で

もあったケリー博士 (Dr. P. Kelly) は、*The Elements of Book-Keeping etc. 1801* の Preface の一部をなす *A short History of Book-keeping* (p. vii) で、メヤー (John Mair) につき、仲々手きびしい論評を加えている。

In 1736, John Mair, a celebrated School-master at Perth, wrote his popular and well-known work, entitled, *Book-keeping Methodized*, which, after passing through several editions, was published, with some alterations, in 1768, under the new Title of *Book-keeping Modernized*. These alteration, he says, became necessary, in consequence “of the constant change and perpetual flux in the forms and fashions of Accountship”. If, however, this improved edition was modelled after the real practice of the time, the forms and fashions of Merchants Accounts must have since undergone great changes also; for persons at present instructed in Mair’s *Book-keeping* only, when placed in a Counting-house, generally found ignorant of what is going forward in every department.

- (3) ミッチェル (William Mitchell) と多桁式

ハットフィールド (H. R. Hatfield) はその著書『近代会計学』(*Modern Accounting, etc., 1909*) の第19章 *Technical Improvement in Accounting Practice* (p. 346) で、とくに、ミッチェルの簿記書に言及し、“the first American text-book”, “In this valuable but little known work” とのべるとともに、とくに、現金出納帳 (Cash Book) が、受取 (支払) 手形勘定、商品勘定 および諸口

(左 頁)

Date	F.	Cash Book	B.Rble.		Mdse.		Dol.	Ct
			Dol.	Ct	Dol.	Ct		
1796		Dr, Cash						
Ap. 1		To.....						

(右 頁)

Date	F.		B.Rble.		Mdse.		Dol.	Ct
			Dol.	Ct	Dol.	Ct		
1796		Contra. Cr.						
Ap. 1		By.....						

を区別した「多桁式」になっている点を指摘している。ミッチェルの簿記書からその実況を紹介すると、上のとおりである。

(4) スブラーグの注目すべき見解(補足)

(i) 英国式貸借対照表に関し

閉鎖残高勘定 (the closing balance account) と開始残高勘定 (the opening balance account) とに着目し、前者がいわゆる「大陸式」貸借対照表の、後者がいわゆる「英国式」貸借対照表の、それぞれルーツであるとする説は、筆者はこの見解には賛成できないが、一部では有力である。

スブラーグもおおむねこの見解に立っている。すなわちいう (『前掲書』, p. 85. 第243・244項)。

This (the closing balance account) would correspond in arrangement to the balance sheet used in most part of the world outside of England,..... (中略) The opening balance account would be the "English" form of balance sheet, with assets on the right.

なお、総勘定との関連でこの両様式を解釈する場合、スブラーグは、資本主との関係にもとづいて、次のようにもいう (p. 31)。この見

解は、残高勘定 (開始残高勘定) をルーツとする先の見解とは、しっくりいかないように思う。むしろ資本主勘定 (次期期首) にそのルーツを求める方が筋がとおっている。

スブラーグは、次のようにいう。

The American mode (注, 大陸式) represents : The universe in account with Jones (注, 資本主)。

The English mode represents : Jones in account with the universe.

(ii) 3 主要簿制 (tre libri principali) に関し

このイタリア式 (ベニス式) 簿記の伝統的帳制に関し、次のようにいう (p. 82)。

236. It was for long time supposed that these three books the Day-book, the Journal, and the Ledger, formed an indispensable triad ; that without these three "principal books" there could be no double-entry bookkeeping,

(i) 現金式仕訳法に関し

現金式仕訳法に関し、スブラーグは、第8章 Proprietorship の第129項で "the cash theory" としてのべ、さらに、第16章 Posting Mediums の第275項で "cash-book entries" としてのべている。

the cash theory として、次のようにいう。
「現金理論では、すべての取引は、現金という形をとって行なわれたとみなす。ある資産と他の資産との直接的な交換ではなく、前者について現金が受取られ、同時に、後者について現金が支払われたものとみなす。かくして、商品を掛で売却したような場合では、商品を現金で売却し、同時に、その現金を得意先に貸付けたものとみなす。

〇〇（人名勘定）×××／商品×××
の場合では、

現金 ××× ／商品×××

〇〇（人名勘定）×××／現金×××
となる。

また、cash-book entries として、次のようにいう。

“Cash-Book used as Journal” として、
「銀行が、支払利息分を、預金者の口座に振込んだような場合では」、「銀行が利息を現金で支払い、預金者が受取った現金をそっくり

そのまま銀行に預金したものとみなせばよい」と。

（5）その他

最近、注目すべき簿記書として、スネル（Charles Snell, 1670-1733）の3種の書物を検討する機会に恵まれた。とくに Rules for book-keeping, etc., 1701 が目立つ。次稿で詳細に解析したいと思う。

元帳の各勘定口座の記帳内容は、その本来の機能からみて、金額だけ示せばよく、相手勘定科目等の記載はいっさい不必要であるとした注目すべき見解が、コルト（J. C. Colt, 1837）やリッチモンド（W. H. Richmond, 1846）にみられる。次稿で詳細に紹介する。

元帳口座面の参照頁（丁数）欄には、仕訳の相手勘定の元帳面の頁数を記入するのか、それとも仕訳帳の当該頁数を記入するのか、その沿革と変遷についても、次稿で詳細にのべることにする。